

シラバス

令和7年度

広島文化学園大学大学院

教育学研究科

博士前期・後期課程

目 次

1. 博士前期課程

・子ども学特論	1
・子ども学演習	2
・子どもの心理学特論	3
・子どもの心理学演習	4
・子ども学学際特講Ⅰ	5
・子ども学学際特講Ⅱ	6
・子ども特別支援教育特論	7
・子ども特別支援教育演習	8
・発達障害の生理・病理特論	9
・子育て支援演習	10
・コミュニティ実践演習	11
・子どもの音楽療法特論	12
・子どもの音楽療法演習	13
・表現活動特論	14
・子どもと言葉演習	15
・子どもと社会生活演習	16
・子どもと自然・数理演習	17
・子どもと衣食住演習	18
・子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅰ	19
・子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅱ	20
・子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅲ	21
・子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅳ	22
・子どもと吹奏楽器実践演習Ⅰ	23
・子どもと吹奏楽器実践演習Ⅱ	24
・子どもと吹奏楽器実践演習Ⅲ	25
・子どもと吹奏楽器実践演習Ⅳ	26
・子どもと造形活動演習	27
・子どもと身体活動演習	28
・子ども道德教育特論	29
・教職実践学特論	30
・教育制度特論	31
・高度教育実践・リフレクションセミナー	32
・子ども学特別研究Ⅰ	33
・子ども学特別研究Ⅱ	34
・子ども学特別研究Ⅲ	35
・子ども学特別研究Ⅳ	36

2. 博士後期課程

・子ども学理論講究Ⅰ（教育学）	37
・子ども学理論講究Ⅱ（教科教育学）	38
・子ども学理論講究Ⅲ（教科教育学）	39
・子ども臨床学講究Ⅰ（発達心理）	40

・子ども臨床学講究Ⅱ（教育心理）	4 1
・子ども臨床学講究Ⅲ（特別ニーズ教育）	4 2
・大学教員実習	4 3
・子ども表現実践学講究Ⅳ（言葉）	4 4
・子ども学特別考究Ⅰ	4 5
・子ども学特別考究Ⅱ	4 6
・子ども学特別考究Ⅲ	4 7

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども学特論		2	30	必修	1年・ 前期	坂越正樹
ね ら い	子どもの全体的な理解と把握を目的として、子ども・子育て支援としての「実践としての子ども学」を思想的、理論的、実践的観点から検討し、「子どもの人間学」の立場からそれらを統合して実践的な臨床知の習得を目標とする。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	わが国における「子ども研究」の歴史	戦前の「児童研究」の特色を箇条書きができる。		小笠原道雄編『進化する子ども学』福村出版、2009年	
	2	戦前のわが国における「子ども研究」の歴史				
	3	戦後のわが国における「子ども研究」の歴史				
	4	60年代の戦後のわが国における「子ども研究」の歴史				
	5	「子ども」観の歴史	「学際的な子ども学」出現の必然性と、意義を箇条書きができる。		坂越正樹編著『教育的関係の解釈学』東信堂、2019年	
	6	「子ども」と「大人」の関係史				
	7	「教師」と「児童・生徒」の教育的関係				
	8	教育的関係の現代的変容				
	9	現代日本における子ども問題としての「虐待」	日本においては「子ども学」の進化が子どもの「虐待」によることを認識できる(レポート提出)。		文部科学省資料ほか	
	10	現代日本における子ども問題としての「いじめ」				
	11	子どもの人間学研究の歴史的展開	「子どもの人間学」とは何かを箇条書き出来る。		和田修二『子どもの人間学』第一法規、1982年	
	12	子どもの人間学研究の必要性				
	13	「現代の子ども学」について	子ども・子育ての実践知を具体的に箇条書き出来る。		坂越正樹編『教育的関係の解釈学』東信堂、2020年	
	14	「子ども・子育て支援」の実践知				
	15	「子ども・子育て支援研究センター」で行う育児＝子ども支援の現場を観察	子どもの動きを記録できる。			
	16	レポート	「子ども学」について自分の理解を簡潔に述べる事が出来る。			
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	現代社会で要請されている「子ども学」について学習者自身が理解し、それを他者に説明することができ、その上で実践に参加できること。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% プレゼンテーション:25% 討議内容:25%		徹底的に学習者中心の学修法をとる。具体的には、毎回の課題も自分で設定し、それをレポートし、発表し、全体の討議にも参加し、それ等を自己評価させる。なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども学演習		2	30	必修	1年・ 後期	坂越正樹
ね ら い	実践学としての子ども学は、具体的な子どもの身体的発達や隠されている感情、衝動の表出、さらにはそれ等の分析の手法を学習することによって、子どもの具体的で全体的な把握が可能となることを理解する。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	教育学の展開	教育学と子どもの人間学の関係を自分の言葉で説明できる。		坂越正樹ほか『未来をひらく子ども学』福村出版、2004年	
	2	教育学の展開と人間学的関心				
	3	教育学と子どもの人間学				
	4	子どもの人間学の必要性				
	5	人間学的にみた子どもの発達の意味	子どもの発達について箇条書きができる。		和田修二『子どもの人間学』第一法規、1982年 小笠原道雄編『進化する子ども学』福村出版、2009年	
	6	人間学的にみた子どもの発達の原理				
	7	人間学的にみた子どもであるための条件				
	8	人間学的にみた子どもの発達の分析				
	9	子どものプロジェクション(隠されている感情や衝動の表出)	子どもの隠されている表出について具体的に説明出来る。		小林登編『新しい子ども学(全3巻)』、海鳴社、1986年	
	10	子どものくからだと自己体験				
	11	子どもの世界におけるくものく	子どもにとってのくものと子どものくねがいについて具体的に説明出来る。		森田伸子『子どもと哲学を一問いから希望へ』勁草書房、2011年	
	12	子どものくねがい				
	13	子どもにとっての教育者	子どもからみた教師や学校について子どもの目線で表現が出来る。		坂越正樹編『教育的関係の解釈学』東信堂、2019年	
	14	子どもからみた学校				
	15	「子ども・子育て支援研究センター」での子どもの活動、保護者、そして教育者の観察	子どもの活動の実際と保護者や教育者の対処法を記録出来る。			
	16	試験	全体的として「子ども学」とは何かを自分の言葉で説明出来る。			
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	現代の子ども学が必要とされている用件を理解し、その実践家として活動できる諸能力を身につける。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% プレゼンテーション:25% 討議内容:25%		座学としての「子ども学」ではなく、「実践学として子ども学」を学ぶために、学習者主体の学修法を徹底する。自分で課題を設定し、その問題解決法を考え、実践／応用能力を身につける。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもの心理学特論		2	30	選択	1年・ 前期	七木田敦・八島美菜子
ねらい	認知・思考の発達, 自己意識の発達, 社会性の発達, 言語の発達について、最新の研究知見を取り入れながら概説する。併せて、講義と学生の報告及び討論によって、発達に影響を及ぼす現代の子どもを取り巻く社会環境の変化などの要因について学び、子どもに関する発達心理学の専門的・批判的態度・視点を深める。					
教育 内容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	授業の導入 ー心理学とはどのような学問領域か	子どもの心身の発達に関する理論及び研究領域、研究内容について幅広く理解する。また、心理学的に子どもを捉えること、臨床現場との関係で子どもを理解することの意味について熟考する。		心理学って何だろう 市川伸一 北大路書房 山崎晃・浜崎隆司編 初めて学ぶこころの世界 北大路書房	
	2	子どもの心理学の領域（１） ー研究領域と動向ー				
	3	子どもの心理学の領域（２） ー環境と子どもの発達ー				
	4	子どもの心理学の領域（３） 親子関係ー愛着ー	保育・教育現場で子どもを発達心理学的に捉えることの意義を考える。		渡辺弥生・伊藤順子・ 杉村伸一郎編『原著で 学ぶ社会性の発達』 ナカニシヤ出版、 2008 年	
	5	子どもの心理学の領域（４） 自己と他者の理解ー性役割の発達ー				
	6	子どもの心理学の領域（５） 社会的問題解決①ーレジリエンスー	多様な子どもの発達を捉える視点について理解を深める。表現と発達について理解を深める。動機づけ、自己制御、仲間関係について理解を深める。		鯨岡峻・鯨岡和子『よく わかる保育心理学』 ミネルヴァ書房、2004 年 遠藤利彦編『発達心理学の 新しいかたち』書 房、2005 年	
	7	子どもの心理学の領域（６） 社会的問題解決②ーソーシャルスキルー				
	8	子どもの心理学の領域（７） セルフコントロール①ー満足遅延ー				
	9	子どもの心理学の領域（８） セルフコントロール②ー攻撃性ー				
	10	子どもの心理学の領域（９） 仲間関係①ー仲間との相互作用ー				
	11	子どもの心理学の領域（１０） 仲間関係②ー仲間内の社会的地位ー				
	12	子どもの心理学の領域（１１） 保育者・教師と子どもの関係① ー保育者と幼児ー				
	13	子どもの心理学の領域（１２） 保育者・教師と子どもの関係② ー教師と生徒ー				
	14	文献の批判的検討① 英語論文レビュー(仲間関係)				
	15	文献の批判的検討② 英語論文レビュー(教師と生徒の関係)				
	16	試験なし				
教育 評価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもに関する発達心理学的研究の基礎的知識の習得、発達のプロセスについて理解し、保育・教育現場における子どもの発達と教育・保育との関連について捉え、その意義を理解する。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポートの内容:25% プレゼンテーション:25% 討議参加:25% 発言内容:25%		文献の紹介文献の内容について自らの意見を発表する。 週 1～2 回/2～3 時間文献、論文等について予習し、同様のペースで授業に必要な予備学習に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもの心理学演習		2	30	選択	1年・ 後期	七木田敦・八島美菜子
ねらい	最新の文献講読をとおり、子どもの発達プロセスとそのメカニズムを生涯発達心理学的視点から研究する能力・視点・態度を学修する。子どもの発達に関する基本的考え方、理論、研究方法、アプローチを理解し、文献解説能力と課題提案能力、解決方法の創出能力を高める。					
教育 内容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	心理学的研究方法 ー多様な研究方法について理解するー	子どもに関する発達心理学的研究の方法論とその分析について理解し、自分でも試してみたい方法について準備を進める。		PsychoInfo, Child Development, and Developmental Psychology 渡辺弥生・伊藤順子・ 杉村伸一郎編『原著で 学ぶ社会性の発達』 ナカニシヤ出版、 2008年	
	2	子どもの発達に関する研究の現状と課題 ー使用図書を参考に興味のあるテーマを理解するー				
	3	心理学的研究の方法論についての討議 ー選定した研究方法について他の文献を参考にしながらその方法論について討議ー				
	4	選定された研究テーマの方法論の理解 ー選定したテーマ・研究の追調査の準備をするー				
	5	調査の実践(1) 予備観察 ー教育・保育現場に出向き、自分の選定した研究について調査をするための対象児を観察するー	子どもに関する心理学的研究の方法を実際に試し、研究で得られる結果の実際について理解を深める。		発達心理学研究 保育学研究 乳幼児教育学研究 科学研究費補助金報告書 受託研究報告書 自治体発行の資料 Handbook of child psychology and developmental psychology, I～IV	
	6	調査の実践(2) 対象児の選定と準備 ー教育・保育現場に出向き、選定した対象児を観察し、データ収集の準備を行うー				
	7	調査の実践(3) 観察とデータ収集① ー教育・保育現場に出向き、選定した対象児を観察し、データ収集を行うー				
	8	調査の実践(4) 観察とデータ収集② ー教育・保育現場に出向き、対象児に対し自分の選定した研究の追調査を行い、データを収集するー				
	9	調査の結果の分析 ー対象児について得られたデータの分析と簡単な結果のまとめを行うー	子どもに関する心理学的研究の分析方法および考察の導き出し方について理解を深め、方法を習得する。			
	10	調査データの現場への還元 ー対象児について担当保育者から情報収集を行い、調査結果と対応づけるー				
	11	調査データ分析結果の考察 ー研究目的と調査結果との対応について熟考するー				
	12	調査研究のまとめ ー調査の結果とオリジナルの研究結果と比較・考察し、発表用資料を作成するー	調査した結果を受け、先行研究と自ら導きだした結果を比較し、研究目的に沿って成果をまとめ、研究のまとめ方について理解し、実践する。			
	13	調査研究のプレゼン資料作成 ー調査の結果についてプレゼン資料の作成及びプレゼンテーションを練習するー				
	14	調査研究に関するプレゼンテーション ー各受講者の調査の結果発表を行うー	発達心理学的に子どもをとらえるとはどのようなことかについて自らの考えをまとめ、論理的に説明できる。			
	15	調査研究についての討議 ー発達心理学研究の実際を体験し考えたこと、発達心理学的に子どもをとらえる際の留意点などについて討議ー				
	16	試験なし				
教育 評価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	発達心理学の方法論を体感することにより、子どもを発達心理学的にとらえるとはどのようなことか、子どもに対する発達心理学的視点とはいかなるものか、について自分の意見を述べるができること。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 発表内容:30% プレゼンテーション:40% レポート:30%		追研究を積極的に体感した上で、発達心理学研究や子どもをとらえる視点について自らの意見を随時述べる形をとる。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要なデータ収集等の事前学習に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども学学際特論Ⅰ		2	30	選択	1前	坂越正樹・七木田敦・八島美菜子・藤金倫徳・満留ゆき・山中翔
ねらい	教育学と一言にいても、その研究対象や研究方法、分析の視座などは多岐にわたる。本講義では、特に非教科教育系の教育諸科学について複数の教員から講義を行う。講義を通して、教育学の多様性を知るとともに、自身の修士論文で依拠すべきディシプリンを探究することをねらいとする。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	教育哲学（１）坂越正樹 教育哲学の視座		各文献を批判的な視点で読み込み、文献の内容はもちろんのこと、論の組み立て方などを理解し、さらなる研究の方向性を考えることができる。		必要資料は、事例ごとに提示する。
	2	教育哲学（２）坂越正樹 教育哲学の対象				
	3	教育哲学（３）坂越正樹 教育哲学の研究・分析方法				
	4	行動分析学（１）藤金倫徳 行動分析学の視座				
	5	行動分析学（２）藤金倫徳 行動分析学の対象				
	6	教育社会学（３）藤金倫徳 行動分析学の研究・分析方法				
	7	道德教育学（１）山中翔 道德教育の歴史				
	8	道德教育学（２）山中翔 小学校道德科との関連				
	9	シティズンシップ山中翔 教育とシティズンシップ				
	10	発達心理学（１）八島美菜子 発達心理学の視座				
	11	発達心理学（２）七木田敦 発達心理学の対象				
	12	発達心理学（３）七木田敦 発達心理学の研究・分析方法				
	13	音楽療法（１）満留ゆき 音楽療法の視座				
	14	音楽療法（２）満留ゆき 音楽療法の対象				
	15	音楽療法（３）満留ゆき 音楽療法の研究・分析方法				
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	各ディシプリンの視座や特徴について説明できるようになる。さらに自身の修士論文の依拠すべきディシプリンについて仮説を生成することができる。		毎回のレジュメにより評価する。		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 なお、これらの作業は週１～２回のペースで２～３時間行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名	
子ども学学際特論Ⅱ		2	30	選択	1後	上田啓二・二階堂年恵・藤居真路・ 湯浅理枝・間處耕吉	
ね ら い	教育学と一言にいても、その研究対象や研究方法、分析の視座などは多岐にわたる。本講義では、特に教科教育系について複数の教員から講義を行う。講義を通して、教育学の多様性を知るとともに、自身の修士論文で依拠すべきディシプリンを探究することをねらいとする。						
教 育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	算数科教育（１）間處耕吉 算数科教育の視座		各文献を批判的な視点で読み込み、文献の内容はもちろんのこと、論の組み立て方などを理解し、さらなる研究の方向性を考えることができる。		必要資料は、事例ごとに提示する。	
	2	算数科教育（２）間處耕吉 算数科教育の対象					
	3	算数科教育（３）間處耕吉 算数科教育の研究・分析方法					
	4	音楽研究（１）上田啓二 音楽研究の視座					
	5	音楽研究（２）上田啓二 音楽研究の対象					
	6	音楽研究（３）上田啓二 音楽研究の研究・分析方法①					
	7	音楽研究（４）上田啓二 音楽研究の研究・分析方法②					
	8	社会科教育学（１）二階堂年恵 社会科教育学の視座					
	9	社会科教育学（２）二階堂年恵 社会科教育学の対象・研究					
	10	生科教育（１） 社会科教育学の視座					
	11	生活科教育（２） 生活科教育の対象					
	12	体育科教育学（１）湯浅理枝 体育科教育学の視座					
	13	体育科教育学（２）湯浅理枝 体育科教育学の対象・研究					
	14	英語科教育（１）藤居真路 英語科教育の視座					
	15	英語科教育（２）藤居真路 英語科教育の対象					
	16	試験なし					
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法		
	各ディシプリンの視座や特徴について説明できるようになる。さらに自身の修士論文の依拠すべきディシプリンについて仮説を生成することができる。		毎回のレジュメにより評価する。		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3 時間行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。		

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども特別支援教育特論		2	30	選択	1前	藤金倫徳
ねらい	知的障害のある子どもの行動を環境との相互作用から理解できるようになるとともに、効果的な指導ができるよう様々な計画をたてることを目指す。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	イントロダクション		授業の概要や進め方、レポートの作り方について説明する。		佐久間徹他訳(2004)はじめての応用行動分析 第2版、二瓶社、を使用。
	2	知的障害とは－その定義－（いかにして、「障害」という状態を障害のない子どもに教示するかという点を含む）		「障害」を伝えることができる。		
	3	知的障害のある子どもの教育の目的:ability の向上と strength の向上		知的障害のある子どもの教育の目的として ability を向上させることとともに strength を高めるという考え方の重要性を説明することができる。		
	4	知的障害のある子どもとインクルージョン		真の意味での「インクルージョン」を説明することができる。		
	5	知的障害児教育の基礎理論（1）望ましい行動の生起確率を高める随伴操作		望ましい行動を促進する方法を計画できる。		
	6	知的障害児教育の基礎理論（2）不適切な行動を減少させる操作		不適切な行動を「抑制」する方法を計画できる。		
	7	知的障害児教育の基礎理論（3）シェイピングと刺激統制		新たな行動を形成する方法を計画できる。		
	8	知的障害児教育の基礎理論（4）Functional assessment と Positive behavior intervention		不適切な行動の機能分析ができるとともにそれに基づいたポジティブな行動介入を計画できる。		
	9	知的障害児教育の基礎理論（5）教育効果の般化促進		学校での指導効果をコミュニティに般化させるための方略が計画できる。		
	10	知的障害児教育の基礎理論（6）刺激等価性の成立		刺激等価性について理解するとともに、刺激等価性のパラダイムを用いた指導が計画できる。		
	11	知的障害児教育の基礎理論（7）モデリング		モデリングを用いた教育について学修する。		
	12	“行動”の教育の実際		VTR を通して“行動”の教育の実際に触れる。		
	13	知的障害児の教育課程の編成と個別の指導計画（1）教科別の指導と領域・教科をあわせた指導		教科別の指導および領域・教科を合わせた指導の融合について学修し、3回目の内容と合わせて、教育を計画できる。		
	14	知的障害児の教育課程と個別の指導計画（2）集団への強化随伴性と個々の子どもへの強化随伴性		集団での指導と個別の指導での随伴性の計画について理解できる。		
	15	行動分析学から見た指導案の作成		行動分析学から見た指導案を作成することができる。		
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	知的障害児教育に関連した教育の目的を理解すると同時に、より効果的な指導を計画できるようになる。		授業内での発言内容:50% レポート等提出物:50%		教科書および各回に関連した先行研究を読むこと。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成するとともに、復習をすること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども特別支援教育演習		2	30	選択	1年・ 後期	藤金倫徳
ねらい	本演習は、前期開講の子ども特別支援教育特論の内容の理解を深め、「自立活動」における「コミュニケーション」の指導を中心に、その他の区分の指導についても検討する。内外の関連する論文から得られた知見をもとに、よりよい自立活動の指導のあり方、方法論について討議する。それにより受講者自身の今後の研究の方向性を明確にすると同時に障害のある子どもの指導力の向上を図る。					
教育 内容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使用図書等 日本行動分析学会編 (2023)新装版 ことば と行動―言語の基礎か ら臨床まで―. 金剛出 版.
	1	イントロダクション―教科書の概要とレジュメの作成 方法		本演習の学修方法や到達目 標について理解する		
	2	コミュニケーション行動の分析の視点		コミュニケーション行動を行動 論の視点からの分析の必要性 が説明できる		
	3	コミュニケーション行動の機能分類		第 2 回で得た知識をもとに、コ ミュニケーション行動の機能分 類について説明できる		
	4	コミュニケーション機能の獲得Ⅰ：マンド		マンドについての基礎的な知 識を得る		
	5	マンドの指導に関する文献購読 1		マンドの指導に関する新旧の 文献を購読し、今後のマンドの 研究に関する方向性を得る		
	6	マンドの指導に関する文献購読 2				
	7	マンドの指導に関する文献購読 3				
	8	コミュニケーション機能の獲得Ⅱ：タクト		タクトにつての基礎的な知識を 得る		
	9	タクトとの指導に関する文献購読 1		タクトの指導に関する新旧の文 献を購読し、今後のタクトの研 究に関する方向性を得る		
	10	タクトの指導に関する文献購読 2				
	11	タクトの指導に関する文献購読 3				
	12	コミュニケーションの指導と対人援助		よりよく生きること、自己決定の 重要性を理解する		
	13	対人援助という視点からの文献購読		対人援助の視点からの論文を 購読し、その実際を理解する		
	14	問題行動とコミュニケーション		FBA(Functional Behavior As- sessment)、PBS (Positive Behavior Support)の重要性に ついて理解する		
	15	教育課程の編成		これまで取り扱った文献購読 等から、より実用的な教育課程 の編成について展望できる		
	16	試験なし				
教育 評価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	国内外のコミュニケーション指導の動 向を理解し、さらにそれらを批判的な 視点から分析でき、よりよい指導のあ り方を考えることができる。		本講義のねらいにしたがい、次のよう に評価する。 予習のレポート:20% 討論内容 :80%		使用図書、先行文献を読むこと。さら に、自ら能動的に授業や討論へ参加す ることを期待する。なお、週 1～2 回のペー スで 2～3 時間文献、論文の読解、考察を 通した予習を行い、同様のペースで課題 に関するレポートを作成し、復習すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・選択別	開講年次	担 当 教 員 名
発達障害の生理・病理特論		2	30	選択	2年・前期	藤金倫徳
ねらい	通常学級に在籍するような学習症、注意欠如多動症(ADHD)や自閉スペクトラム症、発達性協調運動症(DCD)などの発達障害に関する基本的な理解と最近の知見について講義をし、さらに教育および支援法を事例的に検討し理解を深める。そのうえで真のインクルーシブ教育を実現するための視点について解説する。					
教育内容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	オリエンテーション、発達障害概論		発達障害についての概念とその歴史について理解する。		資料を配布する
	2	中枢神経系の構造と機能		各文献を講読し、その内容を理解するとともに説明できるようになる。		
	3	ADHDの生理・病理：理解と支援：生理的基礎知識と原因論				
	4	自閉スペクトラム症の生理・病理：理解と支援：生理的基礎知識と原因論				
	5	学習症の生理・病理：理解と支援：生理的基礎知識と原因論				
	6	DCDの理解と支援：原因論および教育的配慮				
	7	発達障害のある子どもの医療との連携				
	8	発達障害のある子どもの行動の制御①				
	9	発達障害のある子どもの行動の制御② Functional Behavior Assessment				
	10	通常の学級での合理的配慮① 事例研究 1				
	11	通常の学級での合理的配慮② 事例研究 2				
	12	通常の学級での合理的配慮③ 事例研究 3				
	13	インクルーシブ教育の実現のために① People First の視点				
	14	インクルーシブ教育の実現のために② 障害のない子どもの特権と発達障害のある子どもの特権				
	15	文献講読⑧ 『特殊教育・インクルーシブ教育の社会学』8章				
	16	試験なし				
教育評価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	限局性学習症、注意欠如多動症(ADHD)や自閉スペクトラム症、発達性協調運動症(DCD)などの発達障害に関する理解を深め、最近の知見を手掛かりに、教育および支援法を検討しその理解を深めることができる。また発達障害概念が流布している状況について批判的検討を加えることができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 予習のレポート:20% 討論内容 :80%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自ら能動的に授業実践へ参加することを期待する。 なお、週1～2回のペースで2～3 時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子育て支援演習		2	30	選択	2前	津川典子
ねらい	子育て支援をめぐる社会的状況、保育ソーシャルワークの知識等を理解し、具体的に子育て支援現場を観る、聴く、検討することにより、「子育て支援」に関する理論と実践を関連づけていくための知識、方法、倫理等を身に付ける。					
教育 内 容	授 業 概 要				授業到達目標	使用図書等
	1	イントロダクション			本教科のねらい等を理解する。	土谷みち子・汐見稔幸・汐見和恵・野井真吾・山本詩子（2021）『今、もっとも必要なこれからの子ども・子育て支援』風鳴舎 その他必要な資料に関しては、適宜配布する。
	2	これまでの子育て支援とこれからの子育て支援①			これまでの子育て支援の流れを理解する	
	3	これまでの子育て支援とこれからの子育て支援②（母親対象の調査を基とした検討）			調査の結果から子育て支援について考察する	
	4	演習に向けての倫理と配慮 子育て支援の現場の役割を知り、演習における倫理、配慮について学び、それを基盤に自分の自己課題を設定する			演習における配慮、倫理を理解する。 演習先の社会的役割について理解する。 演習における自己課題を明確にすることができる。	
	5	演習 1-1 大学附設地域子育て支援センターでの演習			利用者の活動に配慮しながら演習する。 自己課題の視点を押さえながら演習し、レポートとしてまとめる	
	6	演習 1-2 附設地域子育て支援センター観察結果等の検討			レポートの内容を発表し、それを基に検討する。	
	7	これまでの子育て支援とこれからの子育て支援③（子どものからだの“おかしさ”と遊び）			現在の子どものからだの問題、それに対する「あそび」の意義を理解する	
	8	これまでの子育て支援とこれからの子育て支援④（子育て支援における行政と市民の協働）			子育て支援行政と市民が協働することについて理解する	
	9	これまでの子育て支援とこれからの子育て支援⑤（妊娠期からの切れ目のない子ども・子育て支援について）			妊娠期からの切れ目のない子育て支援について理解する	
	10	保育ソーシャルワーク① 保育ソーシャルワーク（保育 SW）とは			保育ソーシャルワークについて理解する	
	11	保育ソーシャルワーク② 保育ソーシャルワークで使われている技法について（ケースワーク）			ケースワークの技法について理解する。	
	12	保育ソーシャルワーク③ 保育ソーシャルワークで使われている技法について（グループワーク）			グループワークの技法について理解する。	
	13	演習 2-1 大学附設子育て支援センターや地域の子育て支援施設において演習を行う			利用者の活動に配慮しながら演習する。 自己課題の視点を押さえながら演習し、レポートとしてまとめる	
	14	演習 2-2 観察の結果の発表とその検討（2）			レポートの内容を発表し、それを基に検討する。	
	15	まとめ（これからの子育て支援について）			14 回の授業、演習を通して得たことを基にこれからの子育て支援について考える	
	16	試験なし				
教育 評 価	最終到達目標			評 価 法	学 修 法	
	・子育てをめぐる社会的状況を理解しながら、「子育て支援」について考察することができる。 ・子育て支援現場から得た事実と理論をすり合わせ、根拠をさぐる力が育つ。 ・子育て支援現場に関わるための倫理を知り、行動できる。			本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 ・2 回の演習のレポート:60% ・授業、演習の参加状況:40%		・提示している使用図書は各自準備し、事前に読み、自分なりの意見を持つておくこと。 ・演習に向けては、自分の視点を絞っていく作業をすること。 ・現場から学んだこと、感じたことを色々な資料を使って根拠づける作業をすること。

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名	
コミュニティ実践演習		2	30	選択	2年・ 後期		
ねらい	本授業では、まずコミュニティの教育機能と生きる力を育成する学校・家庭・地域社会の全体構造を明らかにする。次に、コミュニティにおける教育機能を具体的に把握しその理解を深める。そして、コミュニティの持つ教育機能を生かした教育の現状と課題を明らかにするとともに、今後の推進・充実方策について考察・まとめを行う。						
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	本演習の教育の概要の理解 子どもを取り巻くコミュニティの現状分析と今後の在り方の探究		子どもを取り巻くコミュニティの現状と今後の在り方を整理することができる。		「教育経営学の視点から教師・組織・地域・実践を考えるー子どものための教育の創造ー」岡東 壽隆, 北大路出版, 2009 年 コミュニティの素材度提示する。	
	2	「生きる力」の育成が求められる背景の明確化		生きる力を育成するための方策をまとめることができる。			
	3	「生きる力」の育成・充実方策の考察					
	4	コミュニティと連携・協力した教育の歩み					
	5	コミュニティと連携・協力した教育の意義の考察					
	6	コミュニティの協力を得て行う教育活動の具体的方策		文献等を基にコミュニティと連携した教育の歩みと意義をまとめることができる。		幼稚園・小学校の教育計画	
	7	コミュニティの素材を教材化する教育活動の具体的方策					
	8	事例研究 コミュニティとの連携・協力による生活科教育		事例研究を通してコミュニティとの連携による教育の要点を整理することができる。			『生涯学習・社会教育行政必携(令和3年度版)』第一法規ストア 必要な資料はその都度提示する。
	9	事例研究 コミュニティとの連携による総合的な学習の時間の実際					
	10	事例研究 コミュニティと公民館等社会教育施設の役割について					
	11	制度事例研究 コミュニティの教育機能を学校教育に生かす学校評議員制度について		事例研究を通してコミュニティの教育機能を生かす効果的な制度の活用方策を整理することができる。		必要な資料はその都度提示する。	
	12	制度事例研究 コミュニティの教育機能を学校教育に生かす学校地域支援本部について					
	13	制度事例研究 コミュニティの教育機能を学校教育に生かすコミュニティスクールについて					
	14	生きる力の育成を目指したコミュニティとの連携・協力による学校教育の推進・充実方策の整理		プレゼンテーションの準備をすることができる。			必要な資料はその都度提示する。
	15	生きる力の育成を目指したコミュニティとの連携・協力による学校教育の推進・充実方策のプレゼンづくり					
	16	試験		コミュニティにおける教育機能を総合的に理解し、プレゼンテーションできる。			
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法		
	生きる力の育成を目指して、コミュニティの教育機能を生かした学校教育の推進・充実方策を自分の意見も含めてまとめて発表することができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 意見発表・討議内容:50% プレゼンテーション:50%		文献研究、調査研究、事例研究を取り入れる。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要なデータ収集等の自習に取り組むこと。		

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもの音楽療法特論		2	30	選択	1年・ 後期	満留ゆき
ね ら い	国内外で実践されている音楽療法関連分野の基礎知識として音楽療法の理解と音楽療法分野の研究内容に関するより専門的な最新のトピックを紹介する。また、自学自修を促進するため、履修者が関連する研究内容(音楽療法の歴史、定義、目的、音楽療法の背景となる様々な理論等)について文献調査をし、その内容を講義の中で紹介し、討議する。					
教 育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等 適宜、教材を配布する。
	1	ガイダンス (評価の方法・通年の流れなどの説明) 音楽療法の定義 (様々な国の視点から)		音楽療法の歴史や音楽療法の 背景となる考えを理解する。		
	2	音楽療法の歴史 (アメリカ、ヨーロッパ、日本)				
	3	音楽療法の文献の探し方 (図書館)		音楽療法の文献調査の基礎を 理解する。		
	4	音楽療法の文献の探し方 (データベース)				
	5	1 乳幼児の音楽療法研究に関する文献講読と討議		様々な年齢を対象とした音楽療 法の研究の動向を理解し、療法 的音楽活動の有用性について 論じることができる。		
	6	2 小学校低学年の音楽療法研究に関する文献講読 と討議				
	7	3 小学校中学年の音楽療法研究に関する文献講 読と討議				
	8	4 中学・高校生の音楽療法研究に関する文献講読 と討議				
	9	研究文献のまとめ方 1		①～④で検索した文献を簡潔に まとめ、研究のテーマやトレンド を理解する。		
	10	研究文献のまとめ方 2				
	11	研究文献のまとめ方 3				
	12	研究文献のまとめ方 4				
	13	音楽療法の背景理論とアプローチの研究に関する討議 ①教育的アプローチ		療法的に音楽を教育やコミュニ ティの場面で使用するための研 究について理解する。		
	14	音楽療法の背景理論とアプローチの研究に関する討議 ②社会的・コミュニティアプローチ				
	15	まとめ・評価		音楽療法研究方法について理 解し、評価する。		
	16	試験		なし		
最 終 到 達 目 標		評 価 法			学 修 法	
音楽療法研究について、その定義、歴史的 背景、対象領域など、国内外での文献を検 索することができる。さらに、音楽療法の研 究論文をとおして現時点までの研究のテー マやトレンドを把握し、音楽の効果的なアプ ローチ方法について熟考し、臨床場面で応 用する力を習得する。		本講義のねらいにしたがい、次のように 評価する。 レポート試験:50% 討議・プレゼンテーション内容:50%			専門書、学術文献を読むこと。平 素から音楽の作用や音楽療法領 域について問題意識を持ち、そ の効果に目を向けて臨床現場や 社会を観察することを期待する。 なお、これらの作業は、週1～2 回のペースで6～7時間でおこな い、授業に必要な予備自習に取り 組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもの音楽療法演習		2	30	選択	2年・ 前期	満留ゆき
ね ら い	国内外で実践されている音楽療法関連分野の基礎知識として、障害児のための音楽療法の歴史と目的を理解し、事例検討を通して多種多様な実践の方法について学ぶ。即興演奏技法を用いたノードフ&ロビンズ音楽療法の理論とテクニックの基礎を学び、楽曲分析を通して、療法的目標と効果についての理解を深める。音楽療法を実践するうえで必要となる、 1. 障害児理解 2. 効果的な音楽の使い方や即興演奏テクニックの基本 3. 年齢、健康状態、そして様々な現場に応じた音楽活動を提案する能力 4. 観察・評価を実践に生かす力、5. 他職種への説明能力およびコミュニケーション能力等を習得することを目標とする。					
	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使用図書等
	1	ガイダンス（評価の方法・通年の流れなどの説明） 音楽療法の定義		音楽療法の歴史的背景と音楽が人間に及ぼす作用をはじめとする基礎知識を習得し、論じることができる。 音楽療法における音楽の使い方として、ノードフ&ロビンズ音楽療法に着目し、即興音楽を臨床的に用いる意味を理解する。		適宜、教材を配布する。
	2	音楽療法の歴史				
	3	音楽の作用				
	4	障害児理解				
	5	事例検討①乳幼児を対象とした音楽療法		乳幼児と小学生を対象とした音楽療法の多様なありかたと具体的な音楽療法的アプローチについて理解する。		
	6	事例検討②小学校低学年を対象とした音楽療法				
	7	事例検討③小学校中学年を対象とした音楽療法		小学生と青少年を対象とした音楽療法の理論と実践方法および療法的音楽活動について学び論じることができる。		
	8	事例検討④中学・高校生を対象とした音楽療法				
	9	効果的な音楽の使用法①打楽器を用いて		打楽器およびメロディ楽器を用いた即興演奏体験を通して音楽の心理的、生理的、社会的作用を理解する。		
	10	効果的な音楽の使用法②メロディ楽器を用いて				
	11	効果的な音楽の使用法③即興的楽器活動		打楽器及びメロディ楽器を用いた即興演奏技能を習得すると共に、音楽演奏中の相互関係に着目し、音楽活動中の自己洞察力を身に付ける。		
	12	効果的な音楽の使用法④即興的な伴奏法				
	13	実技技能の演習①小学校低学年対象		療法的に音楽を使用するための目的、方法を明確にし、計画、実施、評価する力を習得する。ロールプレイを通して障害児理解を深め、学校教育における応用の可能性を学ぶ。		
	14	実技技能の演習②小学校中学年対象				
	15	観察・評価の方法と活用		音楽療法を観察・評価し、保護者や他職種への説明能力の重要性を学ぶ。		
16	試験		音楽療法の基礎知識を用いて、効果的な療育的音楽活動について論じることができる。			
教 育 内 容	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	音楽療法とは何か、という質問に対して、その定義、歴史的背景、心理・社会・生理的理論、国内外での実践例などを用いて論じることができる。さらに、音楽療法からヒントを得た、音楽の効果的な利用法を活用し、教育現場で計画・実践する基礎的な技法を習得する。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート試験:50% 討議・プレゼンテーション内容:50%		専門書、学術文献を読むこと。平素から音楽の作用や音楽療法領域について問題意識を持ち、その効果に目を向けて教育現場や社会を観察することを期待する。なお、これらの作業は、週1～2回のペースで6～7時間でおこない、授業に必要な予備自習に取り組むこと。	
教 育 評 価						

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
表現活動特論		2	30	選択	1年・ 後期	
ねらい	音楽表現活動に関する文献の分析により、歴史的および今日的な事例・課題について考え、各主題に対する考察と研究手法について修得する。授業では、調査した文献および事例についての所見を分析・発表・議論させ、最終的にレポートとして提出させる。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	オリエンテーション		表現活動に関する諸学術雑誌の特徴、文献検索の仕方、先行研究の分析方法等を確認する。		適宜資料を配布する。
	2	日本語文献における表現活動研究①旋律		文献や事例を探索し、旋律、和声、リズム等音楽理論と、声楽、器楽等音楽実践の両方の観点から、表現活動に関する主題を扱う日本語文献を分析し、それに基づくレビュー（発表）ができる。		
	3	日本語文献における表現活動研究②和声				
	4	日本語文献における表現活動研究③リズム				
	5	日本語文献における表現活動研究④声楽				
	6	日本語文献における表現活動研究④器楽（鍵盤楽器）				
	7	日本語文献における表現活動研究⑤器楽（管弦楽器）				
	8	外国語文献の読み方		表現活動に関する英語圏の学術雑誌の特徴、文献検索の仕方、英語文献の読み方等を確認する。		
	9	外国語文献における表現活動研究①旋律		文献や事例を探索し、旋律、和声、リズム等音楽理論と、声楽、器楽等音楽実践の両方の観点から、表現活動に関する主題を扱う英語文献を分析し、その分析に基づくレビュー（発表）ができる。		
	10	外国語文献における表現活動研究②和声				
	11	外国語文献における表現活動研究③リズム				
	12	外国語文献における表現活動研究④声楽				
	13	外国語文献における表現活動研究⑤器楽（鍵盤楽器）				
	14	外国語文献における表現活動研究⑥器楽（管弦楽器）				
	15	最終発表及びレポート		表現活動について総合的な理解ができる。		
16	試験なし					
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	表現活動に関する研究について、理論・実践の両面に関する文献・事例の探索ができ、その的確な分析に基づくレビューができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 発表:50% レポート:50%		学内外の図書館および専門的文献目録による文献探索。探し当てた文献を入手し、ただちにその文献の概要を把握する。 なお、週1～2回のペースで 3 時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子どもと言葉演習		2	30	選択	1年・ 後期	藤居真路・野々村憲
ね ら い	人間の言葉の仕組みを、音韻、語彙、統語などの面から理論的に理解し、子どもが所属する特定の環境の基で、その能力が形成されてゆく過程を検証することにより、子どもに対する言葉指導と教育の実践的知識を修得する。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授業到達目標		使用図書等	
	1	第二言語習得、コミュニケーション能力とは (藤居真路)	言語学(とりわけ英語学)や意思疎通の基礎について理解し、子どもが第二言語を習得する際の特性について客観的に論じることができるようになる。		関連する図書・文献を適宜紹介する。	
	2	曖昧性、結束性と一貫性(藤居真路)				
	3	発話行為、会話の公理、丁寧さ(藤居真路)				
	4	小学校英語教育の目的と目標、日英語の違い (藤居真路)				
	5	小学校英語教育演習 ― CLT を中心に(藤居真路)				
	6	子どもの言語能力の発達	年齢別の言語能力の発達について子ども言葉の表現の実例を入れて論じることができる。		関連する図書・文献は適宜紹介する。	
	7	子ども言葉の表現の実例				
	8	子どもの言語能力の育成	言語能力の発達に必要な環境や条件について論じることができる。		関連する図書・文献は適宜紹介する。	
	9	言語能力の発達と環境				
	10	子どもの言語発達における課題	子どもが言葉を学習していく上での課題・問題について、最新の研究成果に言及しながら論じることができる。		最新の研究論文等は適宜紹介する。	
	11	子どもの言葉教育の理論(野々村憲)	言葉教育の理論と実践例との関係を客観的に説明できる。		関連する図書・文献は適宜紹介する。	
	12	子どもの言葉教育の実践(野々村憲)				
	13	子どもの言葉教育の実践演習(野々村憲)	理論に基づいた言葉の教育と指導が実践できる。			
	14	子どもの言葉教育の指導の在り方(野々村憲)				
	15	まとめ(野々村憲)	学習したことから検討課題を明確にできる。			
	16	試験なし				
教 育 評 価	最終到達目標		評 価 法		学 修 法	
	子どもに対する言葉の指導・教育について、理論的に理解し、検討課題を明確に論じることができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% 討議内容:50%		言葉の成り立ちを理解するための言語学の基礎知識を確実に理解し、その理論に裏付けられた実践力を身に付けることが重要である。追研究を積極的に体感した上で、発達心理学研究や子どもをとらえる視点について自らの意見を随時述べる形をとる。 なお、週1～2回のペースで3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要なデータ収集等の自習に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと社会生活演習		2	30	選択	1年・ 後期	二階堂年恵
ねらい	本授業では、幼稚園教育・生活科・社会科における社会生活の学びの特徴と指導の在り方を発達段階を考慮し、実践事例や演習を通して明らかにする。そして、幼稚園教育から生活科、社会科へと学びが接続・発展していく指導の構想と要点をまとめる。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	幼児の成長・発達と幼稚園教育について	幼児の成長・発達を踏まえ、身近な環境との関わりを通して学ぶ社会生活について実践事例等から具体的に理解する。		「今日の学力をつくる新しい生活科授業づくり」田村学, 明治図書, 2009年 適宜、必要な資料を配布する。	
	2	身近な環境との関わりを通して学ぶ社会生活				
	3	幼稚園教育との接続・発展を考慮した小学校における生活科について	生活科の教科目標・学年目標・内容等から知的な気付きを質的に高める生活科における学びの要点を把握する。			
	4	知的な気付きを質的に高める生活科における学びの要点				
	5	指導計画作成演習① 具体的な活動や体験の充実と指導の要点の把握				
	6	指導計画作成演習② 生活科における表現活動の意義と指導の要点の把握	3・4時で把握した生活科における学びの要点を適用した指導計画を作成し、指導の要点を把握することができる。			
	7	指導計画作成演習③ 自分自身について学ぶ意義と指導の要点の把握				
	8	生活科における学びの特徴と指導の在り方 小学校社会科への接続・発展と生活科の学びの特徴と指導の在り方			ここまでの授業をもとに生活科における学びの特徴と指導の在り方をまとめることができる。	
	9	社会科における学びの基本①目標設定について（二階堂）	社会科の教科目標・学年目標・内容等から社会科における学びの基本的な在り方を把握する。			
	10	社会科における学びの基本②教育内容について（二階堂）				
	11	指導計画作成演習①子どもと地域社会（二階堂）	9・10 時で把握した社会科における学びの基本を適用した指導計画を作成することができる。			
	12	指導計画作成演習②地理（二階堂）				
	13	指導計画作成演習③歴史（二階堂）				
	14	指導計画作成演習④公民（二階堂）				
	15	社会科における学びの特徴（二階堂）	ここまでの授業をもとに社会科における学びの特徴と指導の在り方をまとめることができる。			
	16	試験	幼稚園教育から生活科、社会科へと学びが接続・発展していく指導の構想と要点をまとめることができる。			
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	幼稚園教育から生活科、社会科へと学びが接続・発展していく指導の構想と要点をまとめることができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% 試験:50%		文献研究、事例研究、指導計画作成等の演習。追研究を積極的に体感したうえで、発達心理学研究や子どもをとらえる視点について自らの意見を随時述べる形をとる。なお、週1～2回のペースで3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要なデータ収集等の自習に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと自然・数理演習		2	30	選択	1年・ 後期	
ねらい	子どもの数学・理科的な興味・関心を子どもから引き出すと共に、新しい創造力や応用力を育成するための指導力の基礎を身につける。特に、数学・理科の理論を実際に感じ取ることができる演習、実験の組み立てを考え、子どもの成長と進度に合った授業を探究する。					
教育 内容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	生活科と理科の違い，その接続について		生活科と理科の違い，その接続について理解する。		適宜資料を配布する。
	2	科学的背景に基づく実践①ー観察・実験の指導について		科学的背景に基づく実践の在り方を理解する。		
	3	科学的背景に基づく実践②ーICTの活用について				
	4	科学的な見方・考え方を育成するための問題解決型の学習について		科学的な見方・考え方を育成するための問題解決型学習について理論と実践を理解する。		
	5	科学的な見方・考え方を育成するための問題解決型の学習活動の実践研究①ー第3学年				
	6	科学的な見方・考え方を育成するための問題解決型の学習活動の実践研究②ー第4学年				
	7	科学的な見方・考え方を育成するための問題解決型の学習活動の実践研究③ー第5学年				
	8	科学的な見方・考え方を育成するための問題解決型の学習活動の実践研究④ー第6学年		数学的背景に基づく実践の在り方を理解する。		
	9	数学的背景に基づく実践①ー一斉指導、TTについて				
	10	数学的背景に基づく実践②ー習熟度別等について				
	11	数学的な考え方を伸ばすための問題解決型の学習について		数学的な考え方を伸ばすための問題解決型学習について理論と実践を理解する。		
	12	数学的な考え方を伸ばすための問題解決型の学習活動の実践研究①ー低学年				
	13	数学的な考え方を伸ばすための問題解決型の学習活動の実践研究②ー中学年				
	14	数学的な考え方を伸ばすための問題解決型の学習活動の実践研究③ー高学年				
	15	9か年（小・中）の視点に立った算数指導のあり方について		小中連携の算数(数学)指導の在り方について理解する。		
	16	試験なし				
教育 評価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	児童の数理認識を育てる上で必要な数学・理科的背景、知識・技能、考え方についての理論に基づく実践を行える教員を育成する。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。レポート：50%、模擬授業・実験内容：50%		授業外においても、学んだ、理論、技能、着眼点などを基本に子どもたち進度に合った実践的授業を創造し、検討する。子どもの目線に立った授業の組み立てを常に心がける。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要なデータ収集等の自習に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと衣食住演習		2	30	選択	2年・ 前期	
ねらい	子どもと衣食住とのかかわりを、子どもの現状、発達、歴史、生活環境等から多面的にとらえ直すことを目的とする。					
教育 内容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	オリエンテーション	子どもの生活の現状を把握し、それが子どもの心身の状況と連動していることを理解する。		適宜資料を配付する。	
	2	子どもたちの生活実態				
	3	子どもたちの身体からのSOS				
	4	子どもたちの心からのSOS				
	5	日常生活からみた子どもの衣食住(資料分析)	日常生活からみた子どもの衣食住についての資料を分析し、課題を提起する。			
	6	日常生活からみた子どもの衣食住(課題提起)				
	7	人間発達からみた子どもの衣食住(資料分析)	人間発達からみた子どもの衣食住についての資料を分析し、課題を提起する。			
	8	人間発達からみた子どもの衣食住(課題提起)				
	9	歴史的観点からみた子どもの衣食住(資料分析)	歴史的観点からみた子どもの衣食住についての資料を分析し、課題を提起する。			
	10	歴史的観点からみた子どもの衣食住(課題提起)				
	11	生活環境からみた子どもの衣食住(資料分析)	生活環境からみた子どもの衣食住についての資料を分析し、課題を提起する。			
	12	生活環境からみた子どもの衣食住(課題提起)				
	13	自立した生活者と衣食住	衣食住における自立の必要性、および衣食住を通して学びが広がることを理解する。			
	14	衣食住から広がる学び				
	15	まとめ	子どもと衣食住の関わりについて総合的に理解する。			
	16	試験なし				
教育 評価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもと衣食住とのかかわりを、子どもの現状、発達、歴史、生活環境等から多面的に理解している。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% 課題発表:50%		授業後は、授業内容を確認し、更に必要な資料を収集したり、再度参考文献等を読み直したりする。疑問点は質問できるようにまとめておく。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要なデータ収集等の自習に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅰ		2	30	選択	1年・ 前期	末永雅子
ね ら い	鍵盤楽器のための作品や教材を演奏、分析することにより、子どもと音楽に関する知見を総合的に考察しながら、コミュニケーション能力を高める方法論を学ぶ。Ⅰでは、バロック期の作品に焦点を当てる。					
教 育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	幼児期の音楽的発達と鍵盤楽器のための教材①		幼児期の身体と音楽能力の発達について理解する。		配付資料
	2	幼児期の音楽的発達と鍵盤楽器のための教材②		幼児期の発達段階に適した教材について知る。		配布資料
	3	子どものための演奏技術の習得①読譜		基礎的な読譜と初見演奏法について理解する。		Preparation au Dechiffrage Pianistique 1. Exercices et lecture de notes 2. Intervalles et accords 3. Rythmes
	4	子どものための演奏技術の習得②音程と和声		基礎的な和声法について理解する。		
	5	子どものための演奏技術の習得③リズム		基礎的なリズム演奏法について理解する。		
	6	バロック期における即興演奏		バロック期の作品に必要な即興演奏法について知る。		配付資料
	7	子どものためのバロック作品による即興演奏指導		バロック期の作品を用いた子どものための即興演奏指導法について知る。		配付資料
	8	子どものためのバロック作品		バロック期のさまざまな作曲家による作品について知る。		配付資料
	9	バロック期の即興演奏実践①演奏表現		バロック期における即興演奏と演奏表現について知る。		『正しいクラヴィーア奏法』第一部より
	10	バロック期の即興演奏実践②和声と転調		バロック期における即興演奏のための和声理論について知る。		『正しいクラヴィーア奏法』第二部より
	11	J.S.バッハの鍵盤作品		J.S.バッハの作品における演奏法について理解する。		『インベンションとシンフォニア』『平均律曲集』より
	12	C.Ph.E.バッハの鍵盤作品		C.Ph.E.バッハの作品における演奏法について理解する。		『識者と愛好家のためのクラヴィーア曲集』より
	13	楽曲分析と演奏表現		バロック期の作品から発表曲を選び楽曲分析を行い、演奏する。		発表曲楽譜
	14	発表リハーサル		実践的な演奏と表現法について学び、発表のための準備を行う。		発表曲楽譜
	15	発表		発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表曲楽譜
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの音楽的能力について知り、それぞれの発達段階に適した指導をすることができる。 バロック期の作品による即興演奏法を理解し、実践的な演奏表現法を身につける。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 演奏:50% プレゼンテーション:30% レポート:20%		適宜提示する課題について事前に予習し、授業内で演奏と自身の意見を発表する。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間で行う。なお、演奏活動に関しては週3～4時間のペースで課題に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅱ		2	30	選択	1年・ 後期	末永雅子
ねらい	鍵盤楽器のための作品や教材を演奏、分析することにより、子どもと音楽に関する知見を総合的に考察しながら、コミュニケーション能力を高める方法論を学ぶ。Ⅱでは、古典期の作品に焦点を当てる。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	児童期の音楽的発達と鍵盤楽器のための教材①		児童期の身体と音楽能力の発達について理解する。		配付資料
	2	児童期の音楽的発達と鍵盤楽器のための教材②		児童期の発達段階に適した教材について知る。		配布資料
	3	子どものための演奏技術の習得①ポリフォニー		ポリフォニーの基礎的な読譜と初見演奏法について理解する。		Preparation au Dechiffrage Pianistique 4. Exercices de Rythmes en canon suivis de 24 lectures 5. 30 éléments avec defferents graphismes
	4	子どものための演奏技術の習得②さまざまな奏法		さらに実践的な読譜・初見演奏法について知る。		
	5	子どものための演奏技術の習得③無拍節		さらに高度な読譜・初見演奏法について知る。		
	6	古典期における即興演奏		古典期の作品に必要な即興演奏法について知る。		配付資料
	7	子どものための古典期作品による即興演奏指導		古典期の作品を用いた子どものための即興演奏指導法について知る。		配付資料
	8	古典期の作品様式と即興演奏		ソナタ形式や変奏曲などの様式と即興演奏の関係について知る。		配付資料
	9	子どものための古典期の作品		古典期のさまざまな作曲家による作品について知る。		配付資料
	10	ハイドンによる鍵盤作品		ハイドンの作品における演奏法について理解する。		ソナタ・変奏曲集等楽譜
	11	モーツァルトによる鍵盤作品		モーツァルトの作品における演奏法について理解する。		ソナタ・変奏曲集等楽譜
	12	ベートーヴェンによる鍵盤作品		ベートーヴェンの作品における演奏法について理解する。		ソナタ・変奏曲集等楽譜
	13	楽曲分析と演奏表現		古典期の作品から発表曲を選び楽曲分析を行い、演奏する。		発表曲楽譜
	14	発表リハーサル		実践的な演奏と表現法について学び、発表のための準備を行う。		発表曲楽譜
	15	発表		発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表曲楽譜
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの音楽的能力について知り、それぞれの発達段階に適した指導をすることができる。 古典期の作品による即興演奏法を理解し、実践的な演奏表現法を身につける。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 演奏:50% プレゼンテーション:30% レポート:20%		適宜提示する課題について事前に予習し、授業内で演奏と自身の意見を発表する。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間で行う。なお、演奏活動に関しては週3～4時間のペースで課題に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅲ		2	30	選択	2年・ 前期	末永雅子
ねらい	1年次に学んだ内容を踏まえ、鍵盤楽器のための作品や教材を演奏、分析することにより、子どもと音楽に関する知見を総合的に考察しながら、コミュニケーション能力を高める方法論を学ぶ。Ⅲでは、ロマン期の作品に焦点を当てる。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	幼児期の鍵盤楽器のための教材①	幼児の身体と音楽能力の発達に適した教材について知る。		配付資料	
	2	幼児期の鍵盤楽器のための教材②	幼児の発達段階に適した教材と指導法について学ぶ。		配布資料	
	3	子どものための指導法①音楽理論	基礎的な音楽理論の指導法について理解する。		配付資料	
	4	子どものための指導法②伴奏付け	基礎的な和声法について理解し、伴奏法を学ぶ。		配付資料	
	5	ロマン期における作品の特徴	ロマン期の作品の特徴について知る。		配付資料	
	6	子どものためのロマン期作品	ロマン期のさまざまな作曲家による作品について知る。		配付資料	
	7	子どものためのロマン期作品による指導法	ロマン期の作品を用いた子どものための演奏指導法について知る。		配付資料	
	8	ロマン期の演奏実践①演奏表現	ロマン期における演奏技術と演奏表現について知る。		配付資料	
	9	ロマン期の演奏実践②和声と転調	ロマン期作品の演奏に必要な和声理論について知る。		配付資料	
	10	シューマンの鍵盤作品	シューマンの作品における演奏法について理解する。		『ユーゲントアルバム』	
	11	メンデルスゾーンの鍵盤作品	メンデルスゾーンの作品における演奏法について理解する。		『こどものための小品集』	
	12	チャイコフスキーの鍵盤作品	シューマンの作品における演奏法について理解する。		『こどものためのアルバム』	
	13	楽曲分析と演奏表現	ロマン期の作品から発表曲を選び楽曲分析を行い、演奏する。		発表曲楽譜	
	14	発表リハーサル	実践的な演奏と表現法について学び、発表のための準備を行う。		発表曲楽譜	
	15	発表	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表曲楽譜	
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの音楽的能力について知り、それぞれの発達段階に適した指導をすることができる。 ロマン期の作品について理解し、実践的な指導法と演奏法を身につける。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 演奏:50% プレゼンテーション:30% レポート:20%		適宜提示する課題について事前に予習し、授業内で演奏と自身の意見を発表する。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間で行う。なお、演奏活動に関しては週3～4時間のペースで課題に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと鍵盤楽器実践演習Ⅳ		2	30	選択	2年・ 後期	末永雅子
ねらい	1年次に学んだ内容を踏まえ、鍵盤楽器のための作品や教材を演奏、分析することにより、子どもと音楽に関する知見を総合的に考察しながら、コミュニケーション能力を高める方法論を学ぶ。Ⅳでは、近現代の作品に焦点を当てる。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	児童期の鍵盤楽器のための教材①	児童の身体と音楽能力の発達に適した教材について知る。		配付資料	
	2	児童期の鍵盤楽器のための教材②	児童の発達段階に適した教材と指導法について学ぶ。		配布資料	
	3	子どものための鍵盤楽器指導法①連弾	連弾作品の基礎的な指導法について理解する。		配布資料	
	4	子どものための鍵盤楽器指導法②2台ピアノ	2台ピアノ作品の基礎的な指導法について理解する。		配布資料	
	5	子どものための室内楽指導法	室内楽作品の基礎的な指導法について理解する。		配布資料	
	6	近現代作品の特徴	近現代の作品の特徴について知る。		配付資料	
	7	邦人の作曲家による作品の特徴	邦人による近現代の作品の特徴について知る。		『現代日本ピアノ曲集』	
	8	子どものための近現代作品	近現代のさまざまな作曲家による作品について知る。		『こどものための現代ピアノ曲集』	
	9	子どものための近現代作品による指導法	近現代の作品を用いた子どものための演奏指導法について知る。		配付資料	
	10	カバレフスキーによる鍵盤作品	カバレフスキーの作品における演奏法について理解する。		『こどものための小品集』	
	11	プロコフィエフによる鍵盤作品	プロコフィエフの作品における演奏法について理解する。		『はじめてのピアノ曲集』	
	12	ハチャトゥリアンによる鍵盤作品	ハチャトゥリアンの作品における演奏法について理解する。		『はじめてのピアノ小曲集』	
	13	楽曲分析と演奏表現	近現代の作品から発表曲を選び楽曲分析を行い、演奏する。		発表曲楽譜	
	14	発表リハーサル	実践的な演奏と表現法について学び、発表のための準備を行う。		発表曲楽譜	
	15	発表	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表曲楽譜	
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの音楽的能力について知り、それぞれの発達段階に適した指導をすることができる。 近現代の作品について理解し、実践的な指導法と演奏法を身につける。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 演奏:50% プレゼンテーション:30% レポート:20%		適宜提示する課題について事前に予習し、授業内で演奏と自身の意見を発表する。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間で行う。なお、演奏活動に関しては週3～4時間のペースで課題に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと吹奏楽器実践演習 I		2	30	選択	1年・ 前期	上田啓二
ねらい	子どもが吹奏楽器を奏でるためにボディワークを通して必要な身体の使い方やトレーニングの仕方などを学ぶ。作品の研究や演奏を通して感情の表現やコミュニケーションの大切さなど子どもの感性を育む音楽との関りを、演習を通してその指導論と共に学ぶ。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	オリエンテーション	演奏とボディワークとの関連性を理解する。		配付資料	
	2	楽器の構造と下半身の使い方	子どもの発達段階に適した楽器について知る。		配付資料	
	3	楽器の構え方 下半身の使い方	子どもにとって無理のない構え方について理解する。		配付資料	
	4	腹式呼吸の仕組み 体幹の動き	演奏するための息の重要性について理解する。		配付資料	
	5	楽器が鳴る仕組み 体幹の動き	音を鳴らすための息や共鳴について理解する。		配付資料	
	6	マウスピース及びリードについての実践指導 上半身の使い方	発音源の仕組みを理解する。		配付資料	
	7	アンブシュアの機能 上半身の使い方	音楽的な音を発する身体的メカニズムを知る。		配付資料	
	8	アンブシュアと音程 全身のつながり方	音程を調整する仕組みを知る。		配付資料	
	9	アンブシュアと音色 下半身の使い方	音色の違いが生じる仕組みを知る。		ボディコントロール チェック表	
	10	ブレスアタックの重要性 下半身の使い方	フレーズアタックを決定づける息について理解する。		ボディコントロール チェック表	
	11	ブレスコントロールの訓練 体幹の動き	フレーズを形作るロングブレスの重要性を認識する。		ボディコントロール チェック表	
	12	インターバルにおけるレガート奏法 体幹の動き	閉じた声帯筋と息の支えについて理解する。		ボディコントロール チェック表	
	13	速いフレーズにおけるレガート奏法 上半身の使い方	下半身に支えられた上半身のリラックスを理解する。		ボディコントロール チェック表	
	14	タンギング奏法 上半身の使い方	閉じた声帯筋とリラックスした舌を保持する下半身の支えの重要性を知る。		ボディコントロール チェック表	
	15	ボディコントロールチェックの発表 全身のつながり方	トレーニングフレーズについて学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		ボディコントロール チェック表	
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの演奏能力についての的確に把握し、必要な練習を分かり易く指導することが出来る。 演奏力が表現力に繋がる音楽的感性を身につける。		演奏力 50%、説明力 30% レポート 20%		適宜課される課題について事前に予習する。 ボディワーク 10 分間デイリートレーニングを日々行う。なお、演奏課題に関しては週 3～4 時間のペースで取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと吹奏楽器実践演習Ⅱ		2	30	選択	1年・ 後期	上田啓二
ね ら い	子どもが吹奏楽器を奏でるためにボディワークを通して必要な身体の使い方やトレーニングの仕方などを学ぶ。作品の研究や演奏を通して感情の表現やコミュニケーションの大切さなど子どもの感性を育む音楽との関りを、演習を通してその指導論と共に学ぶ。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	メージャースケール 下半身の使い方	1 オクターブのメージャースケールを暗譜で演奏する。		配付資料	
	2	マイナースケール 下半身の使い方	1 オクターブのマイナースケールを暗譜で演奏する。		配付資料	
	3	エチュードの選定（Ⅰ～Ⅵ） 体幹の動き	子どもの演奏技量に適したエチュードを選定する。		配付資料	
	4	エチュードⅠ・Ⅱ 運指の確認 体幹の動き	必要とされる替え指などを全てチェックする。		エチュードⅠ・Ⅱ	
	5	エチュードⅠ・Ⅱ アーティキュレーション 上半身の使い方	アーティキュレーションの重要性を理解する。		エチュードⅠ・Ⅱ	
	6	エチュードⅢ・Ⅳ クレッシェンドとディミニユエンド 上半身の使い方	ブレスコントロールの基本を体感する。		エチュードⅢ・Ⅳ	
	7	エチュードⅢ・Ⅳ スフォルツァンド 全身のつながり方	ブレスコントロールにおける瞬発力を体感する。		エチュードⅢ・Ⅳ	
	8	エチュードⅤ・Ⅵ インターバル 下半身の使い方	滑らかなインターバル奏ができるようになる。		エチュードⅤ・Ⅵ	
	9	エチュードⅤ・Ⅵ フレーズ 下半身の使い方	ワンプレーズをワンプレスで演奏できるようにする。		エチュードⅤ・Ⅵ	
	10	発表曲の選定 体幹の動き	子どもの演奏技量に適した発表曲を選定する。		配付資料	
	11	発表曲のアナリゼ 体幹の動き	発表曲にある音楽表記について調べ理解する。		発表曲楽譜	
	12	ピアノ伴奏合わせ 主旋律と対旋律 上半身の使い方	ゆっくりとしたテンポで主旋律と対旋律を吹き分ける。		発表曲楽譜	
	13	ピアノ伴奏合わせ フレージング 上半身の使い方	大きなワンプレーズで演奏できるようにフレージングを決める。		発表曲楽譜	
	14	発表曲の仕上げ 全身のつながり方	実践的な演奏と表現法について学び、発表のための準備を行う。		発表曲楽譜	
	15	演奏発表	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表曲楽譜	
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの演奏能力向上についての的確に把握し、必要な練習を分かり易く指導することが出来る。 聞き手に伝わる表現力を身につける。		演奏力 50%、説明力 30% レポート 20%		適宜課される課題について事前に予習する。 ボディワーク 10 分間デイリートレーニングを日々行う。なお、演奏課題に関しては週 3～4 時間のペースで取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと吹奏楽器実践演習Ⅲ		2	30	選択	2年・ 前期	上田啓二
ねらい	子どもが吹奏楽器を奏するためにボディワークを通して必要な身体の使い方やトレーニングの仕方などを学ぶ。作品の研究や演奏を通して感情の表現やコミュニケーションの大切さなど子どもの感性を育む音楽との関りを、演習を通してその指導論と共に学ぶ。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	古典楽曲選曲 ドローイン	子どもの演奏能力に合わせた古典楽曲の選曲を行い息圧保持を認識する。		発表古典楽曲	
	2	古典楽曲アナリーゼ タックイン	選んだ楽曲のアナリーゼを完了し息圧保持を強化する。		発表古典楽曲	
	3	古典楽曲伴奏合わせ ハイチェスト	選んだ楽曲のテンポに合わせた伴奏合わせを完了し音の共鳴を認識する。		発表古典楽曲	
	4	古典楽曲仕上げ 上半身のリラックス	上虚下実の演奏法と表現について学び、発表のための準備を行う。		発表古典楽曲	
	5	古典楽曲演奏発表 ロングトーン	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表古典楽曲	
	6	中期楽曲選曲 ドローイン	子どもの演奏能力に合わせた中期楽曲の選曲を行い息圧保持を認識する。		発表中期楽曲	
	7	中期楽曲アナリーゼ タックイン	選んだ楽曲のアナリーゼを完了し息圧保持を強化する。		発表中期楽曲	
	8	中期楽曲伴奏合わせ ハイチェスト	選んだ楽曲のテンポに合わせた伴奏合わせを完了し音の共鳴を認識する。		発表中期楽曲	
	9	中期楽曲仕上げ 上半身のリラックス	上虚下実の演奏法と表現について学び、発表のための準備を行う。		発表中期楽曲	
	10	中期楽曲演奏発表 ロングトーン	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表中期楽曲	
	11	現代楽曲選曲 ドローイン	子どもの演奏能力に合わせた現代楽曲の選曲を行い息圧保持を認識する。		発表現代楽曲	
	12	現代楽曲アナリーゼ タックイン	選んだ楽曲のアナリーゼを完了し息圧保持を強化する。		発表現代楽曲	
	13	現代楽曲伴奏合わせ ハイチェスト	選んだ楽曲のテンポに合わせた伴奏合わせを完了し音の共鳴を認識する。		発表現代楽曲	
	14	現代楽曲仕上げ 上半身のリラックス	上虚下実の演奏法と表現について学び、発表のための準備を行う。		発表現代楽曲	
	15	現代楽曲演奏発表 ロングトーン	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表現代楽曲	
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの演奏能力向上についての的確に把握し、必要な練習を分かり易く指導することが出来る。 伴奏者と音を通したコミュニケーションが取れる。		演奏力 50%、説明力 30% レポート 20%		適宜課される課題について事前に予習する。 ボディワーク 10 分間デイリートレーニングを日々行う。なお、演奏課題に関しては週 3～4 時間のペースで取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと吹奏楽器実践演習Ⅳ		2	30	選択	2 年・ 後期	上田啓二
ねらい	子どもが吹奏楽器を奏でるためにボディワークを通して必要な身体の使い方やトレーニングの仕方などを学ぶ。作品の研究や演奏を通して感情の表現やコミュニケーションの大切さなど子どもの感性を育む音楽との関りを、演習を通してその指導論と共に学ぶ。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	古典室内楽曲選曲 ドローイン	子どもの演奏能力に合わせた古典室内楽曲の選曲を行い息圧保持を認識する。		発表古典室内楽曲	
	2	古典室内楽曲アナリゼ タックイン	選んだ楽曲のアナリゼを完了し息圧保持を強化する。		発表古典室内楽曲	
	3	古典室内楽曲アンサンブル ハイチェスト	選んだ楽曲のメンバー合わせを完了し音の共鳴を認識する。		発表古典室内楽曲	
	4	古典室内楽曲仕上げ 上半身のリラックス	上虚下実の演奏法と表現について学び、発表のための準備を行う。		発表古典室内楽曲	
	5	古典室内楽曲演奏発表 ロングトーン	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表古典室内楽曲	
	6	中期室内楽曲選曲 ドローイン	子どもの演奏能力に合わせた中期室内楽曲の選曲を行い息圧保持を認識する。		発表中期室内楽曲	
	7	中期室内楽曲アナリゼ タックイン	選んだ楽曲のアナリゼを完了し息圧保持を強化する。		発表中期室内楽曲	
	8	中期室内楽曲アンサンブル ハイチェスト	選んだ楽曲のメンバー合わせを完了し音の共鳴を認識する。		発表中期室内楽曲	
	9	中期室内楽曲仕上げ 上半身のリラックス	上虚下実の演奏法と表現について学び、発表のための準備を行う。		発表中期室内楽曲	
	10	中期室内楽曲演奏発表 ロングトーン	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表中期室内楽曲	
	11	現代室内楽曲選曲 ドローイン	子どもの演奏能力に合わせた現代室内楽曲の選曲を行い息圧保持を認識する。		発表現代室内楽曲	
	12	現代室内楽曲アナリゼ タックイン	選んだ楽曲のアナリゼを完了し息圧保持を強化する。		発表現代室内楽曲	
	13	現代室内楽曲アンサンブル ハイチェスト	選んだ楽曲のメンバー合わせを完了し音の共鳴を認識する。		発表現代室内楽曲	
	14	現代室内楽曲仕上げ 上半身のリラックス	上虚下実の演奏法と表現について学び、発表のための準備を行う。		発表現代室内楽曲	
	15	現代室内楽曲演奏発表 ロングトーン	発表曲について学んだことをもとに演奏と口頭発表を行う。		発表現代室内楽曲	
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの演奏能力向上についての確に把握し、必要な練習を分かり易く指導することが出来る。 アンサンブルで音を通したコミュニケーションが演奏として表現できる。		演奏力 50%、説明力 30% レポート 20%		適宜課される課題について事前に予習する。 ボディワーク 10 分間デイリートレーニングを日々行う。なお、演奏課題に関しては週 3～4 時間のペースで取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと造形活動演習		2	30	選択	2年・前期	清見嘉文
ねらい	「造形活動」は、本来子どもが好む楽しい活動であるが、正解が無く、感覚的であるため、その指導は難しさを伴う。本授業では、造形活動についての多様な理論を理解した上で、現場での実践例を検証する。子ども理解を基軸に演習を通して体験的に学ぶことによって、子どもの造形活動における課題や特性を明らかにすることを目的とする。					
教育 内 容	授 業 概 要			授業到達目標		使用図書等
	1	オリエンテーション(授業の進め方・評価・準備など) 本演習の概要の理解		子どもにとっての「造形活動」の意義を理解し、その授業作りや指導に意欲を持つことができる。		使用図書・文献などは都度提示する。
	2	フレネ教育に見る造形活動		C・フレネ、M・モンテッソーリ、W・シュタイナーを知り、その思想や方法の中で特に造形活動について理解し、それらを授業作りに活かすことができる。我が国以外の教育機関で、子どもたちがどのような造形活動をしているのかを知り、それらを参考にしたり、応用したりすることができる。		鈴木幹雄編『子どもの心にかかりかける表現教育～多様なアプローチと発想を探る』あいり出版、2012年
	3	モンテッソーリ教育に見る造形活動				
	4	シュタイナー教育に見る造形活動				
	5	造形活動・造形教育の国際比較				
	6	造形のもつ力		小学校教育において、造形活動のもつ意味を知り、実践力を高めるための意欲をもつ。		Celestin Freinet 『L'Éducation du Travail』 Delachaux Et Neistle, 1978
	7	子どもの思いや願いを感じ取ろう		子どもの表現の思いを読み取ることの意味を理解する。		
	8	紙から生まれる形		用具を扱う際の心構えをもつとともに、自らが多様な個性をもつ一人であることを理解する。		ルドルフ・シュタイナー・西川隆範 (訳)『人間理解からの教育』ちくま学芸文庫、2013年
	9	思い描く形の実現（目的適応表現）		工作による試行錯誤を通して、目的適応表現の意味を理解する。		
	10	思い描く形の実現(心象表現)		心象を表現する活動の意味を知り、個を尊重することの基本的姿勢を理解する。		
	11	造形遊びをしてみよう		目的に向かう収束的活動とは異なる、各々の児童の思いから生まれる拡散的な表現活動の意味を理解する。		マリア・モンテッソーリ・武田正実 (訳)『創造する子供』エンデルレ書店、2000年
	12	幼児教育の現場から① 実践(0・1・2歳児)		保育園・幼稚園における造形活動についてその意義を理解することができる。子どもの年齢や発達に合った、子どもが十分に楽しめるプログラムを構成することができる。		
	13	幼児教育の現場から② 実践(3・4・5歳児)				
	14	幼児教育における造形活動の検証と開発				
	15	まとめ・発表		目的の明確な造形活動プログラムを考案し、その指導を行うことができる実践力を養う。		奥村高明『子どもの絵の見方:子どもの世界を鑑賞するまなざし』東洋館出版社、2010年
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	造形活動の多様性を理解し、その魅力を実感することができる。その上で、造形活動を通して育む子どもの姿を描き、幼児・児童の発達に応じた授業の形を構想することができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% プレゼンテーション:50%		代表的な教育者の造形教育観を理解するため、多くの文献を読むこと、さらには研究授業や学習会などに積極的に参加し、現場理解に努めることを期待する。また、造形美術そのものに親しみ、それらを愛する心を持って欲しい。なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間で行う。なお、造形諸活動に関しては週3～4時間のペースで課題に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子どもと身体活動演習		2	30	選択	2年・後 期	湯浅理枝
ね ら い	身体活動を通して動くことの楽しさ、表現することの素晴らしさを実感し、幼児の身体活動表現の指導方法を学び、理解を深める。発育発達段階の視点から、体力および体づくりに関する課題を検討し、具体的な方法や教育連携の在り方に関しても理解を深める。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	オリエンテーション	子どもの身体活動における今日の課題を論じることができる。		使用図書・文献などは都度提示する。	
	2	子どもの体力低下問題における現状の分析 -中心となる先行研究の探求と検討-	子どもの体力問題について理論的考察ができ、子どもの発育発達段階の視点から論じることができる。		倉持清美/河邊貴子/ 田代幸代編『事例で学ぶ 保育内容 領域 健康』萌文書林、2007 年	
	3	教材研究① -運動意識と体力低下問題-				
	4	教材研究② -発育発達段階の身体運動と体力低下問題-				
	5	子どもの体力低下問題への方策 -体力低下問題のまとめ-				
	6	子どもの発育発達段階からみた身体活動の分析 -中心となる先行研究の詳細な検討-	子どもの発育発達段階に応じた身体活動における課題について論じることができ、また安全面への配慮や留意点において理解することができる。		細江文利監『新学習指導要領対応 すぐ使える体づくり運動の指導』小学館、2010 年	
	7	教材研究③ -子どもの発育発達段階に応じた運動遊び -				
	8	教材研究④ - 運動遊びに応じた子どもの身体活動指導-				
	9	子どもの身体活動における安全面への配慮 -柔軟性や応急処置の観点から-				
	10	子どもの身体活動指導における留意点 -表現リズム遊び を事例として-	動くことの楽しさ、表現することの素晴らしさを実感できる身体活動の指導計画の作成と実践ができる。		東洋・小澤俊夫・宮下孝広『子どもと教育 児童文化入門』岩波書店、1996 年	
	11	子どもの身体活動における指導計画の作成と実践① -リズム遊び を事例として-				
	12	子どもの身体活動における指導計画の作成と実践② -ネット型(ゲーム)を事例として-				
	13	子どもの身体活動における指導計画の作成と実践③ -体づくり運動を事例として-				
	14	小学校教育と領域「健康」の関連性 -幼小連携の観点から-	講義概要の全体像から領域における関連性の検討課題を明確にできる。			
	15	まとめ 子どもの身体活動に関わる諸要因・課題の検討	子どもの身体活動に関わる諸要因・課題の要点が理解できる。			
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの身体活動における検討課題を明確にすることができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% プレゼンテーション:50%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと、および平素から、子どもの身体活動について問題意識を持って社会を観察することを期待する。 なお、これらの作業は週1～2回のペースで2～3時間で行う。 なお、実技の準備に関しては週3～4時間のペースで課題に取り組むこと。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名	
子ども道徳教育特論		2	30	選択	2年・ 前期	山中翔	
ねらい	道徳教育の理論、歴史、指導法について様々なテキストをもとに学んでいく。本授業の目的は、以下の 2 つである。①道徳教育の意義を自分なりに説明することができるようになる。②道徳授業を批判的に検討し、また自分で構想できるようになる。						
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	イントロダクション		授業の進め方、使用テキストについて説明する。		必要な資料は適宜配布する。	
	2	道徳教育の目的		・多文化共生時代における道徳教育の目的について説明することができる。 ・道徳性発達理論および現在の道徳教育理論の意義や限界について説明することができる。 ・道徳教育における善意の押し付けについて理解し、それを回避する方策について説明することができる。		・西野真由美編『新訂道徳教育の理念と実践』放送大学教育振興会、2020。 ・丸山恭司編『道徳教育指導論』協同出版、2014。 ・高宮正貴『価値観を広げる道徳授業づくり』北大路書房、2020。 ・貝塚茂樹『戦後日本と道徳教育』ミネルヴァ書房、2020。 ・渡邊満、山口圭介、山口意友編『新教科『道徳』の理論と実践』玉川大学出版部、2017。 その他、政治哲学の文献も用いる。	
	3	子どもの道徳性の発達					
	4	現在の道徳教育理論					
	5	道徳教育の暴力性					
	6	西洋における道徳教育の歴史		・道徳教育の歴史について理解し、現在と関連付けて説明することができる。			
	7	日本における道徳教育の歴史①：戦後教育改革と道徳教育					
	8	日本における道徳教育の歴史②：「特別の教科 道徳」の設置					
	9	道徳教育の内容項目①：自然や生命		・道徳の内容項目について理解し、その観点から道徳授業を吟味することができる。			
	10	道徳教育の内容項目②：集団や社会					
	11	道徳授業の方法：心情主義と問題解決型		・心情主義、問題解決型、話し合い道徳、それぞれの特徴を理解し、道徳授業の方法を構想することができる。			
	12	市民育成と道徳教育①：話し合いにちもついた道徳授業					
	13	市民育成と道徳教育②：話し合いの罨					
	14	道徳授業の検討		・教材の価値を見出し、道徳授業を構想することができる。			
	15	道徳授業の構想					
16	レポート		・道徳教育に関して課題を設定し、自分の考えを論述することができる。				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法		
	・道徳教育をめぐる議論の諸論点について理解し、また自分なりの見解をもち、道徳授業を構想することができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 レポート:50% プレゼンテーション:25% ディスカッション:25%		週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。		

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
教職実践学特論		2	30	選択	2年・後期	二階堂年恵
ねらい	幼稚園教諭・保育士、小学校教諭として必要な知識・技術をより高度かつ専門的なものへと高め、子どもの発達と成長へ寄与する専門的職業人としての専門性を学修する。とりわけ、学習権や教育権の知識・意識に優れ、子どもの成長へ結びつけることができるようにする。また、現代社会で生きる子どもたちの成長、発達に不可欠な知識や技術を学び、子どもの育児環境を創造したり、高度な専門的知識に基づく教育活動を行うことができるようにする。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	本講義の概要説明 教師の専門性		教師の専門性の必要性を理解する。さらに、人権や道徳性の発達、育児環境の重要性を理解する。(時津)		堀尾輝久『現代教育の思想と構造』岩波書店、1971.
	2	人権と小学校の教育活動① 学習権と教育権		学習権について理解し、『幼稚園教育要領』『学習指導要領』に示される発達と成長の特徴との関係を理解できる。そして、小学校教育と幼稚園教育の社会的側面を考察し、教育、子育て支援の重要性を把握する。		兼子仁・堀尾輝久『教育と人権』岩波書店、1977.
	3	人権と小学校の教育活動② 学習権と特別活動				
	4	人権と小学校の教育活動③(時津) 学習権と道徳教育				
	5	育児環境をめぐる事例研究① 子ども理解と環境		環境の観点に注目して具体的事例を分析し、教育計画、保育計画を策定することができるようになる。		適宜、教材を配布する。
	6	育児環境をめぐる事例研究② 幼稚園の教育計画と環境				
	7	育児環境をめぐる事例研究③ 保育計画と環境				
	8	育児環境をめぐる事例研究④ 幼児教育と環境の関係				
	9	育児環境をめぐる事例研究⑤ 保育実践と環境の関係		子どもを取り巻く環境を理解し、さらにその創造を構想する。具体的な小学校の授業実践や問題解決を目指す。さらに、具体的事例としてメディア問題、いじめ自殺問題を取り上げ、考察する。		Buckingham,D., <i>After the Death of Childhood :Growing up in the Age of Electronic Media</i> , Polity,2000. Buckingham,D., <i>The Material Child: Growing up in Consumer Culture</i> , 2011.
	10	子どもを取り巻く環境と教育実践① メディアの浸透と子どもの発達				
	11	子どもを取り巻く環境と教育実践② イギリスのメディア教育における教材開発				
	12	子どもを取り巻く環境と教育実践③ 小学校のいじめ自殺問題と人権問題				
	13	子どもを取り巻く環境と教育実践④ 教育活動とメディア		家庭と地域との連携を模索する具体的方法を考察することができる。		適宜、教材を配布する。
	14	幼稚園、保育園の現代的課題① 家庭、地域との連携				
	15	幼稚園教諭、保育士の現代的課題② 専門性とは				
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの発達を人権、環境の観点から理解し、よりよい環境へとコントロール、創造することができる。さらに、小学校教諭として必要な教材開発に関する知識やスキルを身につけて、それを生かした授業実践を展開することができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 文献読解のレポート:50% 事例研究レポート:30% 課題解決レポート:20%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。 なお、週1～2回のペースで 2～3 時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
教育制度特論		2	30	選択	2年・ 後期	松元健治
ねらい	最新の研究成果に基づきながら理論的・実証的分析を行い、我が国の初等教育を中心にした学校教育制度及び幼児教育制度の特質と現代的課題を理解する。					
教育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	オリエンテーション、授業計画について	授業の目的・内容を理解し、授業参画の意欲を高める。		テキスト 授業計画資料	
	2	教育法制の体系について	教育法制の体系を理解する。		テキスト 教育法規資料	
	3	学校教育関係の教育法規	学校教育関係の教育法規の規定内容を理解する。		テキスト 教育法規資料	
	4	学校教育関係の教育法規	学校教育関係の教育法規の規定内容を理解する。		テキスト 教育法規資料	
	5	学校教育関係の課題と改革動向について	学校教育関係の課題と改革動向を理解する。		テキスト 教育法規資料	
	6	学校教育法制に関する研究動向について	学校教育法制に関する研究動向を理解する。		学校教育法制研究資料	
	7	教育行政関係の教育法規とその規定内容について	教育行政関係の教育法規の規定内容を理解する。		テキスト 教育法規資料	
	8	教育行政に関する課題と改革動向について	教育行政に関する課題と改革動向を理解する。		テキスト 教育行政関連資料	
	9	教育行政に関する研究動向について	教育行政に関する研究動向を理解する。		教育行政研究資料	
	10	学校経営に関する概要と改革動向について	学校経営の概要と改革動向を理解する。		テキスト 学校経営関連資料	
	11	学校経営に関する研究動向について	学校経営に関する研究動向を理解する。		学校経営研究資料	
	12	幼児教育・保育制度の概要	幼児教育・保育制度の概要を理解する。		テキスト 幼児教育・保育制度関連資料	
	13	幼児教育制度・保育制度の歴史的展開	幼児教育・保育制度の概要を理解する。		テキスト 幼児教育・保育制度関連資料	
	14	幼保一体化改革の動向について	幼保一体化の改革の動向を理解する。		テキスト 幼保一体化関連資料	
	15	授業内容のまとめ	授業内容全体を総括的に捉える。		テキスト まとめ資料	
	16	試験	教育制度について総合的に述べることができる。			
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	我が国の教育制度の特質と学校教育制度・幼児教育制度等における現代的課題及び研究動向に関する理解を深める。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 期末試験:60% レポート:40%		テキストを使用し、教育制度の特質と課題を体系的に理解する。教育制度関連の研究資料を検索する。教育関係新聞記事を幅広く調査し、現代的動向を把握する。なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名	
高度教育実践・リフレクションセミナー		2	30	選択	2 後 集中	藤金倫徳、湯浅理枝、山中翔、	
ね ら い	在籍校近隣の小学校あるいは幼稚園の実習校1校における教育実習を通して、「子ども・子育て」支援の高度専門的実践家を養成する。						
教 育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	イントロダクション		授業の目標について理解する。		適宜資料を配布する。	
	2	事前指導		実習の意義、心得について理解する。			
	3	実習校での実習—オリエンテーション		・実習校における教育活動の特色について理解する。 ・授業観察等を通して、児童の実態を把握する。			
	4	実習校での実習—児童の実態把握					
	5	実習校での実習—授業観察					
	6	実習校での実習—振り返りと討論					
	7	リフレクション①		これまでの学修を振り返るとともに、新たな課題を設定できる。			
	8	実習校での実習—研究授業のテーマ設定		研究授業のテーマを設定し、教材研究に取り組む。			
	9	実習校での実習—教材研究					
	10	リフレクション②		これまでの学修を振り返るとともに、新たな課題を設定できる。			
	11	実習校での実習—研究授業の学習指導案作成		・学習指導案を作成する。 ・討論を通して、研究テーマを深める。			
	12	実習校での実習—学習指導案に関する討論					
	13	リフレクション③		これまでの学修を振り返るとともに、研究授業に向け、新たな課題を設定できる。			
	14	実習校での実習—研究授業の実施		学習指導案をもとに授業を実施する。			
	15	事後指導および統括リフレクション		実習全体が十分に省察できしており、効果的な総括レポートが作成できる。			
	16	試験なし					
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標			評 価 法		学 修 法	
	・履修目標:教育実習を通じた有為の教員の養成というこの科目のミッションを理解し、「学習指導案の作成」「教科等の専門知識」「児童生徒の理解」「学年・学級経営」などの側面から、他の教職員との協力のもと、教育実習指導の計画・実践・評価・改善を主体的かつ効果的に進めることができる。 ・到達目標:教育実習を通じた有為の教員の養成というこの科目のミッションを理解し、「学習指導案の作成」「教科等の専門知識」「児童生徒の理解」「学年・学級経営」などの側面から、教育実習指導の計画・実践・評価・改善を効果的に進めることができる。			左記、履修目標、到達目標に則り、以下のルーブリックにより評価を行う。		研究授業に向けて、各自の研究テーマについて主体的に考察すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名	
子ども学特別研究Ⅰ		2	30	必修	1年・前期	七木田敦・坂越正樹・二階堂年恵・八島美菜子・藤金倫徳・	
ねらい	修士論文作成のためのテーマ設定を中心に、次年度の「子ども学特別研究Ⅲ」「子ども学特別研究Ⅳ」の準備を行う。テーマの内容を演習形式で発表・討論しながら、担当教員の指導を受ける。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。						
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	子ども学特別研究の趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理について理解を深める。		『子ども学研究法』を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性を知る。		使用図書・文献などは都度提示する。	
	2	研究の取り組み：学際的研究の意味		研究の取り組み方やテーマの方向性を決定する。		適宜、教材を配布する。	
	3	基礎文献の輪読、調査(1)：国内の文献(指定テキストの輪読)		国内外の基礎文献を輪読し、関連分野の理解を深める。		<指定テキスト> 教育学： 小笠原道雄編『進化する子ども学』福村出版、2009年。 和田修二『子どもの人間学』第一法規、1982年。 M. J. ランゲフェルト、H. ダンナー（山崎高哉監訳）『意味への教育：学的方法論と人間学的基础』1989年、玉川大学出版部 特別支援教育：藤井聰尚『「特殊学校就学義務」政策の研究—ドイツ連邦共和国における問題構造とその性格』多賀出版、1993年。 造形活動：マリア・モンテッソーリ・武田正実（訳）『創造する子供』エンデルレ書店、2000年。 音楽活動：梅本堯夫『子どもと音楽』東京大学出版会、1999年。	
	4	基礎文献の輪読、調査(2)：国外の文献(指定テキストの輪読)					
	5	基礎文献の輪読、調査(3)：国外の文献(指定テキストの輪読)					
	6	研究テーマの設定(1)：現代・地域における子どもの問題		研究テーマの設定に向けて絞り込むことができる。			
	7	研究テーマの設定(2)：臨床の知について		絞り込んだテーマについて指導教員等と討論することができる。			
	8	研究課題の設定(1)：子ども学における位置づけ		自らの関心や学問的動向を踏まえて、解明する具体的な課題を決定する。			
	9	研究課題の設定(2)：研究課題の意味		研究課題にいかなる意味があるのかを検討する。			
	10	研究課題の設定(3)：理論面からの意義づけ		研究課題の論理構成について把握する。			
	11	研究課題の設定(4)：実践面からの意義づけ		解明する具体的な課題を決定する。			
	12	研究計画書の作成(1)：枠組み、目的		指導担当教員のもとで研究計画の枠組みを作成する。			
	13	研究計画書の作成(2)：方法		指導担当教員指導のもとで研究計画の枠組みを作成する。			
	14	研究計画書の作成(3)：内容		指導担当教員指導のもとで研究方法の検討を行う。			
	15	研究計画書の作成(4)：実践知・臨床知との関連		指導担当教員指導のもとで研究計画のスケジュールを検討する。			
	16	試験なし					
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法		
	基礎文献の理解、先行研究の検討を通して、研究テーマを決定し、研究計画書を作成できるようにする。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 研究計画書：50% 授業態度：50%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。 なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。		

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども学特別研究Ⅱ		2	30	必修	1年・後期	七木田敦・坂越正樹・二階 堂年恵・八島美菜子・藤金 倫徳
ね ら い	修士論文作成のためのテーマ設定を中心に行い、次年度の「子ども学特別研究Ⅲ」「子ども学特別研究Ⅳ」の準備を行う。テーマの内容を演習形式で発表・討論しながら、担当教員の指導を受ける。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。					
教 育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	子ども学特別研究Ⅱの趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理について理解を深める。		『子ども学研究法』を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性を知る。		使用図書・文献などは都度提示する。
	2	基礎文献の輪読、調査(1):国内の文献:指定テキストの輪読		国内外の基礎文献を輪読し、関連分野の理解を深める。		適宜、教材を配布する。 ＜指定テキスト＞ 教育学: 小笠原道雄編『進化 する子ども学』福 村出版、2009年。 和田修二『子どもの 人間学』第一法 規、1982年。 M. J. ラングフェルト、H. ダンナー (山崎高哉監訳) 『意味への教育: 学的方法論と人 間学的基础』1989 年、玉川大学出版 部 特別支援教育:藤井 聰尚『「特殊学校 就学義務」政策の 研究—ドイツ連 邦共和国におけ る問題構造とそ の性格』多賀出 版、1993年。 造形活動:マリア・ モンテッソーリ・ 武田正実(訳)『創 造する子供』エン デルレ書店、2000 年。 音楽活動:梅本堯夫 『子どもと音楽』 東京大学出版会、 1999年。
	3	基礎文献の輪読、調査(2):国内の文献:指定テキストの輪読				
	4	基礎文献の輪読、調査(3):国外の文献:指定テキストの輪読				
	5	基礎文献の輪読、調査(4):国外の文献:指定テキストの輪読				
	6	先行研究の分析(1):子どもへの視座からの考察		研究テーマと関係する先行研究を調査する。		
	7	先行研究の分析(2):資料調査と分析		先研究テーマと関係する先行研究を調査する。		
	8	先行研究の分析(3):資料収集と分析		先行研究を収集し、まとめる。		
	9	先行研究の分析(4):分析結果のまとめ		先行研究を分析し理解する。		
	10	先行研究の分析(5):研究動向の整理		先行研究の動向や傾向を理解する。		
	11	中間報告(1):研究枠組み(臨床知における位置づけ)		指導担当教員のもとで研究の枠組みを作成する。		
	12	中間報告(2):研究目的(子ども学研究における意義)		指導担当教員のもとで研究目的を作成する。		
	13	中間報告(3):研究計画		指導担当教員指導のもとで研究計画を作成する。		
	14	中間報告(4):研究方法		指導担当教員指導のもとで研究方法の検討を行う。		
	15	中間報告(5):資料の検討		指導担当教員指導のもとで使用資料を検討する。		
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	先行研究の検討を通して、項目別に中間報告を実施、研究の課題と方法の妥当性を検討できるようにする。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 中間報告:50% 授業態度:50%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。 なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども学特別研究Ⅲ		2	30	必修	2年・前期	七木田敦・坂越正樹・二階堂年恵・八島美菜子・藤金倫徳
ねらい	前年度の「子ども学特別研究Ⅰ」「子ども学特別研究Ⅱ」で行ったテーマ設定を受けて、担当指導教員の指導の下で論文作成の材料をそろえ、吟味・配列していく。具体的には文献調査、実地調査を行い、修士論文作成に取り掛かる。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）』等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	子ども学特別研究Ⅲの趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理について理解を深める。		『子ども学研究法』を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性を知る。		使用図書・文献などは都度提示する。 適宜、教材を配布する。
	2	研究計画の確認と論文題目の検討		研究計画を確認し、論文題目を担当指導教員と検討する。		
	3	文献調査、実地調査(1):全体的／個別的な子ども理解に向けて		指導担当教員のもとで文献調査、実地調査		
	4	文献調査、実地調査(2):子ども支援と子ども理解				
	5	文献調査、実地調査(3):臨床知／実践知の獲得に向けて				
	6	文献調査、実地調査(4):地域の子どもの臨床知／実践知				
	7	文献調査、実地調査(5):まとめ				
	8	研究計画の確認と論文題目の決定		研究計画を再度確認し、論文題目を最終決定する。		
	9	研究データの分析(1):データ収集・分析		収集したデータの整理、研究データとして系統化する。		
	10	研究データの分析(2):データ整理				
	11	研究データの分析(3):データの系統化				
	12	研究データの考察(1):現代的な子ども問題(子育て支援、コミュニティの役割等)の解決に向けて		系統化して発見したことと仮説を比較検証する。導き出された結論を整理する。		
	13	研究データの考察(2):子ども学研究としての意義について				
	14	文献調査、実地調査報告書の作成(1):理論面からの意義づけ		文献調査、実地調査の分析結果を報告書として提出する。		
	15	文献調査、実地調査報告書の作成(2):実践面からの意義づけ				
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	実際に文献調査、実地調査したデータを整理、系統化することができる。さらに、これらと仮説を比較検証し、導き出した結論を整理することができるようにする。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 文献調査、実地調査報告書:50% 授業態度:50%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。 なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども学特別研究Ⅳ		2	30	必修	2年・後期	七木田敦・坂越正樹・二階堂年恵・八島美菜子・藤金倫徳
ねらい	前年度の「子ども学特別研究Ⅰ」「子ども学特別研究Ⅱ」で行ったテーマ設定、今年度前期の「子ども学特別研究Ⅳ」で行ったデータ収集、分析を踏まえて、担当指導教員の指導の下で論文を作成する。さらに、研究成果を公表、発表することで、修士論文を完成させる。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。					
教育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等
	1	子ども学特別研究Ⅳの趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理について理解を深める。		『子ども学研究法』を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性を知る。		使用図書・文献などは都度提示する。 適宜、教材を配布する。
	2	研究論文の作成(1):子ども学研究における位置づけ		指導担当教員のもとで研究論文の作成を作成する。		
	3	研究論文の作成(2):理論面からの意義づけ				
	4	研究論文の作成(3):実践面からの意義づけ				
	5	論文構成の確認と研究内容の吟味(1)		指導担当教員のもとで論文の進捗具合と研究内容を確認し修正する。		
	6	研究論文の作成(4):専門領域における位置づけ		指導担当教員のもとで研究論文の作成を作成する。		
	7	研究論文の作成(5):具体的・全体的な子ども理解に向けて				
	8	研究論文の作成(6):子ども学研究における意味				
	9	論文構成の確認と研究内容の吟味(2)		指導会担当教員のもとで論文の進捗具合と研究内容を最終確認する。		
	10	修士論文研究報告の準備(1):子ども学研究における位置づけ		修士論文研究報告会の資料を作成する。		
	11	修士論文研究報告の準備(2):理論面からの意義づけ				
	12	修士論文研究報告の準備(3):実践面からの意義づけ				
	13	修士論文研究報告の準備(4)		質疑応答への準備、運営やパフォーマンの準備を行う。		
	14	修士論文研究報告の準備(5)				
	15	修士論文研究の発表:子ども学研究における意味		修士論文研究報告会で研究成果を発表する。		
	16	試験なし				
教育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	これまでの学修成果、すなわちデータの収集、分析、考察を踏まえ、修士論文を完成させることができる。		本講義のねらいにしたがい、次のように評価する。 研究論文:50% 授業態度:50%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。 なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子ども学理論講義Ⅰ(教育学)		2	30	選択	1年・前期	坂越正樹・渡邊満
ね ら い	子ども学理論領域:教育学の科目として「教育学」の原義をギリシャ語の「子どもを導く術」に通底する実践学と理解し、幼稚園の創始者Fr.フレーベルの教育思想から現代の「子どもの人間学」にいたる過程を検証し、現代の子ども学の思想、理論、問題を修得する。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授業到達目標		使用図書等	
	1	子ども学理論研究についての導入(坂越)	理論研究の立場、位置、課題を理解する		小笠原道雄編『教育の哲学』,2003.	
	2	教育学の原義及びその展開(坂越)	実践学としての教育学の発生について理解する		小笠原道雄(編)『教育学概論』,2008.	
	3	近代教育学の成立とその展開(坂越)	近代教育学の性格と子どもの把握について理解する		同上	
	4	現代教育学の展開(坂越)	現代における教育理論の多様性について理解する。		同上	
	5	教育学における子ども(坂越)	近代教育学の展開のなかで子どもがどのように理解され、把握されたかを理解する		小笠原道雄(編)『教育の哲学』,2003.	
	6	近代教育学におけるペスタロッチーとフレーベル(渡邊)	J.J.ルソー、J.H.ペスタロッチーの系譜における子ども理解を把握する		小笠原道雄著『フレーベルとその時代』,1994.	
	7	フレーベルと幼稚園(渡邊)	フレーベル幼稚園の特徴を理解する		同上	
	8	新教育運動における子ども(坂越)	モンテッソーリ等の新教育運動の子ども観の特徴を理解する		市丸・松本(編)『モンテッソーリ教育の理論と実践』,1978.	
	9	児童学研究から子ども学の研究へ(坂越)	子どもの人間学研究の必要性について理解する		和田修二著『子どもの人間学』,1982.	
	10	ランゲフェルドの子どもの人間学(坂越)	ランゲフェルドの子どもの人間学の特徴を理解する		同上	
	11	大人と子どもの教育的関係(坂越)	大人と子どもの関係性の歴史、現代的様相について理解する		坂越著『教育的関係の解釈学』,2020.	
	12	近代教育学批判(坂越)	ポストモダンの教育学の構築について理解する		同上	
	13	わが国に於ける子ども学研究と諸課題(渡邊)	子ども学研究の動向と諸問題について理解し、討論する		小林・小嶋・原・宮沢(編)『新しい子ども学』1.2.3.巻1985-6.	
	14	わが国に於ける子ども学についての討論(渡邊)	研究の特徴を全体で討議し理解を深める		同上	
	15	わが国に於ける子どもの諸問題(渡邊)	子ども問題の諸相について理解する		保坂編『日本の子ども虐待』,2007.	
	16	試験なし				
教 育 評 価	最終到達目標		評 価 法		学 修 法	
	自己の子ども理解の理論を確実にし、その問題解決方法を臨床の知として習得する。		次のように評価する。 討議・講義での発言内容:50% 課題レポート:50%		大学院生研究室に「子ども学」関係の書籍、資料を完備しているのでそれを院生は自由に使用し、討論、レポートに備える。自学自習に徹する。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・選択別	開講年次	担当教員名
子ども学理論講究Ⅱ (教科教育学)		2	30	選択	1年・後期	二階堂年恵
ねらい	本授業の目標は、社会科教育の理論と実践的課題について、具体的事例の検討を通して明らかにすることが出来ることである。さらに、これらの検討を通して、各自の研究主題について主体的に考察・調査し、発表できるようになることである。					
教育内容	授業概要		授業到達目標		使用図書等	
	1	社会科の理論について	社会科におけるいくつかの代表的な社会科論について理解を深める。		「新社会科教育学ハンドブック」	
	2	社会科の性格規定について	社会科における特質について理解を深める。		「新社会科教育学ハンドブック」	
	3	社会科の内容編成(カリキュラム)について	社会科におけるカリキュラム編成について理解を深め、その課題について検討する。		適宜資料を配布する。	
	4	社会科の内容編成(単元)について	社会科における単元構成について理解を深め、その課題について検討する。		適宜資料を配布する。	
	5	社会科の方法原理について	社会科における理解、議論などの方法原理について理解を深める。		適宜資料を配布する。	
	6	社会科の評価について	社会科における評価方略について理解を深め、その課題について検討する。		適宜資料を配布する。	
	7	社会科授業における技術と原理について	社会科授業における資料や教材活用の意義について理解を深める。		適宜資料を配布する。	
	8	社会科における論争点について	社会科における論争点について理解を深める。		適宜資料を配布する。	
	9	社会科のアイデンティティについて	社会科の本質をめぐる論点について理解を深める。		適宜資料を配布する。	
	10	社会科の実践授業とその構造について	社会科の実践授業についての構造を分析する。		適宜資料を配布する。	
	11	社会科の実践的課題について	社会科の実践的課題について、具体的事例を用いて検討する。		適宜資料を配布する。	
	12	社会科の学習指導について	社会科の学習指導について理解を深め、その問題点を明らかにする。		適宜資料を配布する。	
	13	社会科の学習評価について	社会科の学習評価とその課題について理解を深め、その問題点を明らかにする。		適宜資料を配布する。	
	14	研究成果についての発表	各自の研究成果についての発表を行い、問題点を明確にする。		適宜資料を配布する。	
	15	研究成果についてのまとめ	各自の研究主題についてのまとめを行い、今後の課題等について検討する。		適宜資料を配布する。	
	16	試験なし				
教育評価	最終到達目標		評価法		学修法	
	社会科教育の理論と実践的課題について、具体的事例の検討を通して明らかにし、発表することが出来る。		次のように評価する。 レポート:50% 討議内容:50%		各自の研究主題について主体的に考察・調査し、十分に発表できるよう準備すること。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子ども学理論講究Ⅲ(教科教育学)		2	30	選択	2年・前期	
ね ら い	算数科教育の理論と実践的課題についての理解と多面的な把握を目的として、算数科カリキュラム及び算数科の学習指導の実際を歴史的に検討し、カリキュラム・社会・子どもの立場から算数科のあり方について総合的に考察することができるようになることを目標とする。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使用図書等	
	1	わが国における算数科カリキュラムの歴史	わが国の算数科カリキュラムの変遷とそれぞれの特色を箇条書きにできる(レポート提出)。		授業に必要な資料を適宜準備し配布する。	
	2	戦前の算数科カリキュラムの歴史				
	3	戦後の算数科カリキュラムの歴史				
	4	現代化以降の算数科カリキュラムの歴史				
	5	数学的な考え方から見た算数科カリキュラム	数学的な考え方とは何か記述することができる。			
	6	小中接続から見た算数科カリキュラム	算数と数学との関係について記述できる。			
	7	数学的リテラシーから見た算数科カリキュラム	算数科が社会に対して果たす役割について記述できる。			
	8	学力からみた算数科カリキュラム				
	9	これからの社会における算数科カリキュラムについてのプレゼンテーション及び討議				
	10	数理認識と算数科カリキュラム	算数科教育における子どもの素朴概念の重要性について具体例を挙げて述べることができる。			
	11	算数科カリキュラムにおける実験・実測・調査等の数学的活動の位置づけ	実験・実測・調査等をどのようにカリキュラムに位置づけるべきか自分の意見を述べることができる。			
	12	算数科からみた教科統合	算数科と他教科との教科統合的扱いをデザインすることができる。			
	13	問題解決型の算数科授業デザイン	探究活動や能動的な学びの授業をデザインする方法について具体例を挙げて述べることができる。			
	14	算数科教育における評価	多様な評価法について、方法と特徴を述べることができる。			
	15	これからの算数科教育	自分の理想とする算数科教育について主張し、議論することができる。			
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	これからの社会において求められている算数科教育のあり方を理解し、それを他者に説明することができ、授業づくりに活かすことができる。		レポート:40% プレゼンテーション:30% 討議:30%		各回の最後に提示される次の資料・文献を読み整理するとともに、関連資料を収集し、自らの課題意識を明確にして授業に参加する。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子ども臨床学講義Ⅰ (発達心理)		2	30	選択	1年・前期	七木田敦、八島美菜子
ね ら い	子ども学理論領域:教育臨床学の科目として、発達心理の観点から子どもの発達過程における物理的・社会的環境、保育者・教師の影響及び心理臨床的な課題や支援について、愛着理論、心の理論、アイデンティティ理論等を通して検証し、支援の実態を踏まえながら、子どもの発達支援の教育プログラム開発を目指す。					
教 育 内 容	授 業 概 要			授 業 到 達 目 標		使用図書等
	1	子ども臨床学研究Ⅱについての導入		発達臨床研究の位置づけ、課題について理解する。		Handbook of Child Psychology and Development (2014) Wiley & Sonsを使用。 情動の合理性をめぐり心理学的考究(遠藤利彦、2013) また、最新の文献については、適宜紹介する。
	2	認知発達・概念発達と理論		認知発達・概念発達とその理論を理解する。		
	3	心の理論の獲得と関連する要因		心の理論の獲得とその関連要因について学修する。		
	4	自己実現と発達		自己実現理論と発達との関連について学修する。		
	5	アタッチメント理論の基礎		アタッチメントに関する諸理論について学修する。		
	6	ハヴィガーストの人間の発達課題と教育		子どもの発達課題理論について学修する。		
	7	社会的学習理論と認知発達理論の基礎		社会的学習理論や認知発達理論の基礎について学修する。		
	8	社会的学習理論と認知発達理論		社会的学習理論や認知発達理論を学修する。		
	9	アイデンティティ理論の基礎		アイデンティティ理論について理解する。		
	10	発達臨床支援の実際(1) 幼児・児童の発達とアセスメント		幼児・児童の行動観察をとらえて、実際の発達を捉える。		
	11	発達臨床支援の実際(2) 思春期・青年期の課題と支援		思春期・青年期における現代的・心理的課題について理解し、支援の方向性を探る。		
	12	発達臨床支援の実際(3) 障がいをもつ人の課題と支援		障がいをもつ人の心理・社会的課題について理解し、支援の方向性を探る。		
	13	発達臨床支援の研究(1) 発達臨床場面での支援研究		臨床場面での支援に関連する要因を精査し、支援プログラムを構成を検討する。		
	14	発達臨床支援の研究(2) 発達支援プログラム研究の検証		臨床場面での支援プログラムの有効性について検証を行う。		
	15	子ども臨床学の将来的課題		全体討議:子どもの発達と支援に関わる将来的課題と発展について理解する。		
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	子どもの発達過程と発達理論・認知行動理論および社会的適応に関する諸要因を理解し、不適応行動の予防への問題解決法を身につけること。		次のように評価する。 討議での発言内容:50% 課題レポート:50%		大学院用図書及び心理学文献情報検索資料に基づいて討議と課題レポートに備える。各自の研究テーマとの関連づけにも心がけることとする。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要な予備自習に取り組むこと。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子ども臨床学講究Ⅱ (教育心理)		2	30	選択	1年・前期	八島美菜子
ね ら い	子ども学理論領域:教育臨床学の科目として、教育臨床心理の観点から子どもの園・学校・家庭でのストレス、教師ストレスや保護者の子育てストレスとその対処や支援、近年のインターネット依存やSNSを介した人間関係など現代的課題が子どもの社会的適応に及ぼす影響ついて、多様なアプローチから検証し、子どもの不適応予防の教育プログラム開発を目指す。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授業到達目標		使用図書等	
	1	子ども臨床学研究Ⅱについての導入	臨床学研究の立場、課題について理解する		Thompson,R.A. 著 「 Preventing child maltreatment through social support 」 (1995) SAGEの一部、谷口弘一著「児童・生徒のサポートの互惠性と精神的健康」(2013)晃洋書房、嶋田洋徳著「小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究」(1998)風間書房、その他に適宜内外の文献を活用する。	
	2	子どものストレス①就学前施設	子どものストレスについて園生活においてみられる研究事例により検証する			
	3	子どものストレス②学校	子どものストレスについて学校生活においてみられる研究事例により検証する			
	4	子どものストレス③家庭	子どものストレスについて家庭生活においてみられる研究事例により検証する			
	5	子どものストレス④インターネット	インターネット依存やSNSにおける人間関係においてみられる研究事例より検証する			
	6	保護者のストレスと子どもへの影響	子育てストレスにより起こるマルトリートメントについて子どもへの影響を理解する			
	7	教師のストレス過程	職業ストレス理論の観点から教師のストレス過程をやバーンアウトについて理解する			
	8	教師のストレスと子どもへの影響	教師ストレスと子どもの学級適応の関連性を理解する			
	9	子どもの学校ストレスと対処過程	子どもの学校ストレスと対処過程について研究事例により検証する			
	10	Lazarusのストレス・コーピング理論	ストレス・コーピング理論の原義を学修する			
	11	コーピングと認知・行動理論	認知・行動理論の原義を学修する			
	12	子どもの不適応と個人特性・対人関係	子どもの不適応の要因となる個人特性や対人関係における特性について理解する			
	13	子どもの不適応予防とソーシャルスキル介入研究	個人スキルアプローチの介入プログラム有効性について検証を行う			
	14	子どもの不適応予防とピアサポート介入研究	集団アプローチの介入プログラム有効性について検証を行う			
	15	子ども臨床学の将来的課題	全体討議:将来的課題について理解する			
	16	試験なし				
教 育 評 価	最終到達目標	評 価 法		学 修 法		
	子どもの社会的適応にかかわる園・学校・家庭でのストレス過程とサポート理論、認知・行動理論の理解を確実なものとし、不適応予防への問題解決法を学修すること	次のように評価する。 討議での発言内容:50% 課題レポート:50%		大学院用図書及び心理学文献情報検索資料に基づいて討議と課題レポートに備える。各自の研究テーマとの関連づけにも心がけることとする。 なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要な予備自習に取り組むこと。		

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
子ども臨床学講究Ⅲ (特別ニーズ教育)		2	30	選択	1年・後期	藤金倫徳
ね ら い	本授業は、応用行動分析の視点から、特別支援教育の中でも臨床場面での指導やアセスメントの方法を主たるトピックとして扱う。文献講読、ディスカッションを中心とした演習形式で開講する。なお、授業は文献(英語を含む)を理解したり、それをもとにディスカッションをしたりするための基礎的英語スキルを前提として行う。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使用図書等	
	1	授業の導入:日本の特別支援教育	日本の特別支援教育の概要について理解する。		適宜配布する。	
	2	インクルーシブ教育の概要	日本のインクルーシブ教育政策の概要について理解し、今後のインクルーシブ教育のあり方について見解を述べることができる。		適宜配布する。	
	3	マジョリティとマイノリティ	マイノリティの特権、マジョリティの特権という視点から、2回目で得た見解をさらに深めることができる。		適宜配布する。	
	4	特別な教育的ニーズのある子どもの教育の目的	特別な教育的ニーズのある子どもの教育の目的について理解する。		適宜配布する。	
	5	子どもの「自立」「QOLの向上」とは何を意味するか	「自立」「QOLの向上」について理解する。		適宜配布する。	
	6	どのように実現するか(1)ヒトの行動のメカニズム	ヒトの行動のメカニズムについて理解する。		適宜配布する。	
	7	どのように実現するか(2)行動マネジメント	障害のある子どもの行動を様々な場面でいかにマネジメントするかを理解する。		適宜配布する。	
	8	どのように実現するか(3)社会的スキル	社会的スキルの指導について理解する。		適宜配布する。	
	9	どのように実現するか(4)コミュニケーション行動1	ヒトのコミュニケーション行動について、行動分析的視点から理解する。		適宜配布する。	
	10	どのように実現するか(5)コミュニケーション指導2	9回目の理解をもとに、コミュニケーション指導について理解する。		適宜配布する。	
	11	どのように実現するか(6)コミュニケーション指導3	9回目および10回目の授業をもとに、コミュニケーション指導について理解を深める		適宜配布する。	
	12	臨床場面の評価(1)行動の定義と測定	ターゲット行動をいかに定義するか、さらにはその測定をいかに行うかを理解する。		適宜配布する。	
	13	臨床場面の評価(2)1事例の実験デザイン	反転実験計画法や多層ベースライン法などを理解する。		適宜配布する。	
	14	臨床場面の評価(3)一致率	Inter-Observer Agreementについて理解するとともに、その限界についても理解する。		適宜配布する。	
	15	授業の総括:特別なニーズのある子どもの指導に係る倫理	臨床活動を行う際の倫理的課題やそれを発展させ、臨床活動を行うものの養成にあたっての倫理的側面を解説する。		適宜配布する。	
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	応用行動分析の視点からの特別な教育的ニーズのある子どもの教育について体系的な理解を得るとともに、その課題を乗り越えるための学術的・実践的示唆を検討することができる。		次のように評価する。 ディスカッションでの発言内容:50% レポート:50%		授業中に配布する資料に加えて、関連する文献を探索させ、適宜口頭発表をさせる。 なお、週1~2回のペースで2~3時間文献、論文の読解、考察を通した予習を行い、同様のペースで課題に関するレポートを作成し、復習すること。	

教 科 目 名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担 当 教 員 名
大学教員実習		2	30	選択	2年・前期	坂越正樹・二階堂年恵
ね ら い	本授業は、教材研究、授業実践(事前指導、事後指導)、模擬授業、検討ディスカッションなどを通して、大学の授業のあり方やその方法論を学修することを目指す。とりわけ、ITやメディアの教育利用を重視し、メディアの教育利用の意味や方法論を身に付け、「たしかな授業力」を備えた大学教師となるための技術、資質、能力を育成する。さらに、その方法論を教育心理学、教科内容学の観点から分析し、改善していく。					
教 育 内 容	授 業 概 要		授 業 到 達 目 標		使 用 図 書 等	
	1	大学教育の特質(坂越)	大学教育と小中高の教育のちがいを理解する。		宇佐美寛『新訂版大学の授業』東信堂、1999年。	
	2	大学における授業実践のあり方(二階堂)	講義型の授業実践と討論型の授業実践を比較し、分析・検討する。		二階堂年恵『現代アメリカ初等法関連教育授業構成論研究』風間書房、2010	
	3	授業案の作成(1)教材研究(二階堂)	教科教育の視座に基づき教材研究の方法論を学ぶ。		同上	
	4	授業案の作成(2)教育学に基づく生徒指導の活用(坂越)	心理学に基づく生徒指導のあり方を学び、授業実践への活用を模索する。		F.J.メッドウェイ他(田中宏二他訳)『学校心理学—社会心理学的パースペクティブ』北王路書房、2005年。	
	5	授業案の作成(3)メディア教育に基づくメディア利用(坂越)	メディア教育学の知見に基づき、授業におけるメディア利用のあり方を考察する。		Buckingham,D., J.Grahame and J.Sefton-Green Making Media:Practical Production in the Media1 Education, English and Media Centre, 1995.	
	6	授業案の作成(4)教育観、学生観の省察(二階堂)	自ら作成した授業案にある教育観、学生観をめぐって議論する。		適宜配布する	
	7	模擬授業(1)授業実践(二階堂)	受講生同士が模擬授業を行い、互いの授業を分析する。		適宜配布する	
	8	模擬授業(2)検討会(二階堂)	担当教員、受講生によって模擬授業の改善点を研究する。		適宜配布する	
	9	模擬授業(3)振り返りシートの記入(二階堂)	授業実践、検討会を踏まえ、振り返りシートして授業をまとめあげ、授業論として分析する。		適宜配布する	
	10	学内実習(1)授業実践(二階堂)	学内における授業実践を行い、互いの授業を分析し、改善点を模索する。		適宜配布する	
	11	学内実習(2)検討会・振り返りシートの記入(二階堂)	実習授業の担当者、本授業の担当者も交え、授業を分析・検討し、議論する。		適宜配布する	
	12	学外実習(1)授業実践(二階堂)	提携校内における授業実践を行い、互いの授業を分析し、改善点を模索する。		適宜配布する	
	13	学外実習(2)学外検討会(二階堂)	実習授業の担当者、その他学外の教員も交えて、授業を分析・検討し、議論する。		適宜配布する	
	14	学外実習(3)学内検討会・振り返りシートの記入(二階堂)	本授業の担当者、受講者同士が授業を分析・検討し、議論する。そして振り返りシートをまとめあげる。		適宜配布する	
	15	大学における「授業力」とは何か(坂越)	授業実践、検討会を踏まえ、大学の授業のあり方を探る。		Masterman,L. (宮崎寿子訳)『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社、2010。	
	16	試験なし				
教 育 評 価	最 終 到 達 目 標		評 価 法		学 修 法	
	大学の授業のあり方やその方法論を学修し、「たしかな授業力」を備えた大学教師となるための技術、資質、能力を育成する。		次のように評価する。 振り返りシート:30% 授業構想の内容:30% 授業実践・教育実践(模擬授業):40%		大学教育、授業実践に関する先行文献をおよび、国内外の学術論文を精読すること。さらに、自ら能動的に授業実践へ参加する。なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要な予備自習に取り組むこと。	

教科目名		単位数	時間数	必修・ 選択別	開講 年次	担当教員名
子ども表現実践学講究Ⅳ(言葉)		2	30	選択	2年・後期	江端義夫
人間の 教育	本科目では、はじめに言語表現の一般理論を学習する。次いで、最先端の言語理論を踏まえながら、児童文学論を学ぶ。さらに、具体的な文学作品の読解分析を通して、フレーベルの『人間の教育』に基づき、子どもの言語表現の立場から人間学的教育の本質を論究する。					
教 育 内 容	授業概要		授業到達目標		使用図書等	
	1	言語表現に関する基本的文献の講読および講義	言語表現の基盤にある言⇒言語⇒言語活動の3角形を理解する。		ソシュール『一般言語学』、1940	
	2	アメリカにおける構造言語学的普遍知の講読および講義	あいまいさを排除した科学的構造主義言語学を理解する。		ブルームフィールド『言語』、1962	
	3	子ども表現の詩的価値、文化的相対性を発見した学知を学ぶ。	サピアーフの仮説をはじめ、子どもや文化の相対性を理解する。		サピア『言語』、1998	
	4	言語生得説を発明し、現在もなお世界中を魅了する人と学知を知る。	子どもの言語発達や表現の発達を考究する自在性を学ぶ。		チョムスキー『生物言語学の探究』、2007	
	5	リリアン・H・スミスの世界的な名著を呼んで、イギリスの児童文学の豊かさを考える。	近代日本の児童文学を開拓した石井桃子氏らが、1964年に邦訳した。1～6章まで読む。予習が大切。		リリアン・H・スミス『児童文学論』、1964	
	6	前回に引き続いてスミスの名著を読む。	同上 7章～12章まで読む。		同上	
	7	日本の中世から江戸時代に流行した「おとぎぞうし」の表現に親しむ。	江戸の上流階級の子が、仮名書の「おとぎぞうし」を嫁入り道具に持参したといわれるが、現代と比べ、主題の差を理解する。		日本古典文学大系38『御伽草子』、1968	
	8	日本の名作『遠野物語』の表現に親しむ。	死んだはずの老婆が狂女のわきを通ると、急に炭かごがぐるっと回る。文学の心を探し求める。		『遠野物語』(定本柳田國男集第4巻)1968	
	9	村上春樹が見つけて訳本を出した異色の絵本をとりあげ、その意味を考える。	世界の絵本や童話や児童文学は、おとなの文芸よりも多彩で、どんどん先を行く。しかし、一つの異色の絵本があることを知る。		村上春樹訳『大きな木』、バートン文・絵	
	10	子どもの心を楽しませ、わくわくさせる表現のとは何かについて考える。	代表作を熟読することにより、スケールの大きな構想力や科学的な探究心を身につける。		サン・テグジュペリ作『星の王子さま』1953	
	11	子ども学を標榜する中で、フレーベル『人間の教育』の中の「教育方法の原理」を課題にする。	第4篇「生徒としての人間」における学校在在、教科言語、言語教育についての氏の考え方を理解する。		フレーベル『人間の教育』上、1964	
	12	フレーベルの著作の第4章を課題とする。	フレーベルの「家庭と学校との結合、およびそれによって制約される教科について」を理解する。		フレーベル『人間の教育』下、1964	
	13	フレーベルの当該書の第五篇「全体の概観を結ぶ」を課題とする。	フレーベルの『人間教育』(上・下)を理解するために、第一篇「全体の基礎づけ」を熟読し、理解する。		フレーベル『人間の教育』上・下、1964	
	14	学校教育における指導要領は、「幼・小・中・高」を一貫した人間性を求める教育方針であることを理解する。	幼児期から児童期に至る言語表現能力とそれに伴う音声表現活動や唯美的活動について理解する。		拙著『国語表現』『国語総合』、2015	
	15	子どもの表現実践能力を育成するために、「幼・小・中・高」を一貫したカリキュラムで作成する問題点を考える。	①通年式カリキュラムと②幼・小・中・高を通した段階式カリキュラムの特徴を理解し、統一の可能性について考察する。		拙著『国語表現』『国語総合』、2015	
	16	試験なし				
教育 評価	最終到達目標		評価法		学修法	
	全15回の授業は、総合的には言語学と文学と教育とが調和する。「授業内容」の課題を「使用図書」で読み込み、各回の「授業到達目標」を目指すことが期待される。		次のように評価する。 討議への参加・発言内容:40% 課題レポート:60%		著名な洋書には、文庫本の訳本があるので、各自購入すること。使用図書を参考にし、予習・復習を行うと共に、学修内容に関する疑問については、履修者が互いに問題を共有し、解決に向けて積極的に取り組むこと。なお、週1～2回のペースで2～3時間文献、論文、データに関する分析を予習とし、同様のペースで授業に必要な予備自習に取り組むこと。	

教科目名		単位数	時間数	必修・選択別	開講年次	担当教員名
子ども学特別考究I		2	60	必修	1年・通年	坂越正樹・七木田敦・二階堂年恵・藤全倫徳
ねらい	博士論文作成のためのテーマ設定を中心に行う。テーマの内容を演習形式で発表・討論しながら、担当教員の指導を受ける。次にそのテーマ設定を受けて、担当指導教員の指導の下で論文作成の材料をそろえ、吟味・配列していく。具体的には文献調査、実地調査を行い、研究データの分析・考察を行い、博士論文の作成に取り掛かる。最終的に研究データの分析、考察を受けて、担当指導教員の指導の下で論文を作成し、完成させる。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。					
教育内容	授業概要		授業到達目標			使用図書等
	1	子ども学特別研究(第一期)の趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理と研究実施並びに、公的研究費の運営・管理について理解を深める	『子ども学研究法(第一期)』を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性及び、公的研究費の運営・管理にかかる責任を知る。			使用図書・文献などは都度提示する。 適宜、教材を配布する。
	2	研究の取り組み:学際的・融合的研究の意味	研究の取り組み方やテーマの方向性を決定する			
	3	基礎文献の輪読、調査(1):国内の文献	国内外の基礎文献を輪読し、関連分野の理解を深める			
	4	基礎文献の輪読、調査(2):国外(英語圏)の文献				
	5	基礎文献の輪読、調査(3):国外(欧語圏等)の文献				
	6	研究テーマの設定(1):現代・地域における子どもの問題	研究テーマの設定に向けて絞り込むことができる			
	7	研究テーマの設定(2):臨床の知について	絞り込んだテーマについて指導教員等と討論することができる			
	8	研究テーマの設定(3):子ども学上の位置	研究テーマの子ども学上の位置を理解できる			
	9	研究テーマの設定(4):融合研究としてのあり方	研究テーマの融合研究としてのあり方を理解できる			
	10	研究テーマの設定(5):専門領域との関連	研究テーマと専門領域との関連を考察できる			
	11	研究課題の設定(1):子ども学における位置づけ	自らの関心や学問的動向を踏まえて、解明する具体的な課題を決定する			
	12	研究課題の設定(2):専門領域における位置づけ	研究課題にいかなる意味があるのかを検討する			
	13	研究課題の設定(3):理論面からの意義づけ	研究課題の論理構成について把握する			
	14	研究課題の設定(4):実践面からの意義づけ	解明する具体的な課題を決定する			
	15	研究計画書の作成(1):研究対象	担当教員のもとで、倫理について配慮して研究計画の枠組を作成する。			
	16	研究計画書の作成(2):研究方法	指導担当教員指導のもとで研究計画の研究方法を作成する			
	17	研究計画書の作成(3):研究体制	指導担当教員指導のもとで研究体制の検討を行う			
	18	研究計画書の作成(4):実践知・臨床の知との関連	実践知・臨床の知との関連を理解できる			
	19	研究計画書の作成(5):子ども学上の意義	子ども学上の意義を検討できる			
	20	研究計画書の作成(6):まとめ	研究計画書をまとめることができる			
	21	先行研究の分析(1):子どもへの視座からの考察	先行研究を子どもの視点から考察する			
	22	先行研究の分析(2):社会への視座からの考察	先行研究を社会の視点から考察する			
	23	先行研究の分析(3):国外の研究動向	国外の研究動向を理解する			
	24	先行研究の分析(4):国内の研究動向	国内の研究動向を理解する			
	25	先行研究の分析(5):自らの研究と先行研究の関連	先行研究と自らの研究の関連を理解する			
	26	先行研究の分析(6):先行研究の特徴	先行研究の特徴を理解できる			
	27	先行研究の分析(7):先行研究の問題点	先行研究の問題点を見出すことができる			
	28	先行研究の分析(8):研究テーマの可能性	自らの研究の可能性を検討できる			
	29	先行研究の分析(9):まとめ	先行研究の整理とその問題点を理解する			
	30	子ども学特別研究(第一期)の総括	研究テーマ・課題・計画書・先行研究を整理し、自らの研究テーマを策定する			
	31	試験	試験なし			
教育評価	最終到達目標		評価法			学修法
	基礎文献の理解、先行研究の検討を通して、研究テーマを決定し、研究計画書を作成できるようにする。 実際に文献調査、実地調査したデータを整理、系統化することができる。さらに、これらと仮説を比較検証し、導き出した結論を整理することができるようにする。		次のように評価する。 研究計画書:20% 文献に関する考察論文:30% 実地調査:20% 授業態度:30%			先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。

教科目名		単位数	時間数	必修・選択別	開講年次	担当教員名
子ども学特別考究Ⅱ		2	60	必修	2年・通年	坂越正樹・七木田敦・二階堂年恵・藤金倫徳
ねらい	博士論文作成のために設定したテーマに従って研究をすすめる。テーマの内容を演習形式で発表・討論しながら、担当教員の指導を受ける。担当指導教員の指導の下で論文作成の材料をそろえ、吟味・配列していく。具体的には文献調査、実地調査を行い、研究データの分析・考察を行い、博士論文の作成に取り組む。最終的に研究データの分析、考察を受けて、担当指導教員の指導の下で論文を作成し、完成させる。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。					
教育内容	授業概要			授業到達目標		使用図書等
	1	子ども学特別研究(第二期)の趣旨の趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理と研究実施並びに、公的研究費の運営・管理について理解を深める		「子ども学特別研究(第二期)」を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性及び、公的研究費の運営・管理にかかる責任を知る。		
	2	研究の取り組み:学際的・融合的研究の意味		学際的・融合研究の意味を理解する		
	3	研究計画の確認と論文題目の検討		論文題目を検討する		
	4	文献調査、実地調査(1):理論-実践問題		調査を理論-実践問題から考察する		
	5	文献調査、実地調査(2):調査の仮説		調査の仮説を立てる		
	6	文献調査、実地調査(3):方法		調査の方法の妥当性を検討する		
	7	文献調査、実地調査(4):対象		調査対象を明確にする		
	8	文献調査、実地調査(5):まとめ		調査で明らかになったことを検討する		
	9	研究計画の確認と論文題目の決定		調査を踏まえて論文題目を決定する		
	10	研究データの分析(1):視点		収集したデータを分析する視点を定める		
	11	研究データの分析(2):整理		収集したデータを整理、解析する		
	12	研究データの分析(3):検討		収集したデータを分析して明らかになったことの意義と可能性を検証する		
	13	研究データの分析(4):意義				
	14	研究データの分析(5):限界		収集データで分析できなかったことを検証する		
	15	研究データの分析(6):まとめ		データの分析について整理し、まとめる		
	16	中間発表(1)		これまでの研究成果を踏まえ中間発表を行う		
	17	中間発表(2)				
	18	研究データの考察(1):概念の整理		考察に際して概念を整理する		
	19	研究データの考察(2):先行研究との関連		先行研究と関連付ける		
	20	研究データの考察(3):先行研究上の位置づけ		先行研究上の位置づけを検討することができる		
	21	研究データの考察(4):学術的背景の整理		先行研究も含めた学術的背景を把握することができる		
	22	研究データの考察(5):明示された成果		研究成果を明らかにする		
	23	研究データの考察(6):成果の意義		研究成果の意義を検討する		
	24	研究データの考察(7):独創的な点		研究の独創的な点を見出す		
	25	研究データの考察(8):研究計画との整合性		研究計画との整合性を把握する		
	26	研究データの考察(9):仮説との照らし合わせ		仮説と照らし合わせ、その価値等を把握する		
	27	研究データの考察(10):研究倫理		研究倫理の観点から研究データを検討する		
	28	研究データの考察(11):今後の課題		今後の課題を明示する		
	29	研究データの考察(12):まとめ		研究データの考察についてまとめ整理する		
	30	子ども学特別研究(第二期)の総括		研究データの分析、考察を通して明示されたことを把握する		
	31	試験		試験なし		
教育評価	最終到達目標		評価法		学修法	
	基礎文献の理解、先行研究の検討を通して、研究テーマを決定し、研究計画書を作成できるようにする。 実際に文献調査、実地調査したデータを整理、系統化することができる。さらに、これらと仮説を比較検証し、導き出した結論を整理することができるようにする。		次のように評価する。 研究計画書:20% 文献に関する考察論文:30% 実地調査:20% 授業態度:30%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。 さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。 なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。	

教科目名		単位数	時間数	必修・選択別	開講年次	担当教員名
子ども学特別考究Ⅲ		2	60	選択	3年・通年	坂越正樹・七木田敦・二階堂年恵・藤金倫徳
ねらい	博士論文の完成に向けて研究をすすめる。テーマの内容を演習形式で発表・討論しながら、担当教員の指導を受ける。担当指導教員の指導の下で論文作成の材料をそろえ、吟味・配列していく。具体的には文献調査、実地調査を実施し、研究データの分析・考察を行った成果をまとめる。最終的に、担当指導教員の指導の下で論文を作成し、審査を受ける。文部科学省通知「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」等を活用し、研究にあたっての倫理的配慮・課題について認識を深める。					
教育内容	授業概要		授業到達目標		使用図書等	
	1	子ども学特別研究(第三期)の趣旨の説明及び、人を対象とする場合の研究倫理と研究実施並びに、公的研究費の運営・管理について理解を深める	「子ども学特別研究(第三期)」を学ぶことの意味について理解し、研究における倫理の重要性及び、公的研究費の運営・管理にかかる責任を知る。			
	2	研究論文の作成(1):草稿計画	草稿計画を作成する			
	3	研究論文の作成(2):キーワードの整理	キーワードをピックアップし、整理する			
	4	研究論文の作成(3):導入部の作成	導入部を作成する			
	5	研究論文の作成(4):エビデンスの整理	エビデンスを整理し、妥当性を検証する			
	6	研究論文の作成(5):要約の作成	論文の要約を作成する			
	7	論文構成の確認と研究内容の吟味(1)	指導担当教員のもとで論文の進捗具合と研究内容を確認し修正する			
	8	研究論文の作成(6):表と図の作成	表と図を作成し、デザインする			
	9	研究論文の作成(7):引用	引用方法について吟味する			
	10	研究論文の作成(8)草稿の改稿	草稿を改稿し、編集する			
	11	研究論文の作成(9):導入部	導入部を修正する			
	12	研究論文の作成(10):結論部	結論部を修正する			
	13	研究論文の作成(11):主張	主張を整理し、その妥当性を検証する			
	14	研究論文の作成(12)まとめ	研究論文の作成についてまとめ、研究論文を完成させる			
	15	論文構成の確認と研究内容の吟味(2)	指導担当教員のもとで論文の進捗具合と研究内容を最終確認する			
	16	研究論文の完成(1)	指導担当教員の指導にしたがい、研究論文を最終的に作成し、完成させる			
	17	研究論文の完成(2)				
	18	博士論文研究報告の準備(1):焦点	研究報告の焦点を明確にする			
	19	博士論文研究報告の準備(2):導入部の概略	導入部の概略を作成する			
	20	博士論文研究報告の準備(3):本論の概略	本論の概略を作成する			
	21	博士論文研究報告の準備(4):結論部の概略	結論部の概略を作成する			
	22	博士論文研究報告の準備(5):引用の慣行	引用について慣行にしたがっているかチェックする			
	23	博士論文研究報告の準備(6):プレゼンテーション資料の作成:主張部分	プレゼンテーション資料の主張部分を作成する			
	24	博士論文研究報告の準備(7):プレゼンテーション資料の作成:エビデンス・資料部分	プレゼンテーション資料のエビデンス・資料部分を作成する			
	25	博士論文研究報告の準備(8):質問への準備	博士論文発表会の質問を想定し、回答を準備する			
	26	提出資料の完成(1):博士論文	博士論文の提出版を作成する			
	27	提出資料の完成(2):概要	博士論文の概要を作成する			
	28	提出資料の完成(3):プレゼンテーション資料	発表会のプレゼンテーション資料を完成させる			
	29	博士論文研究の発表(1)	博士論文研究の発表を行い、これまでの研究成果について審査を受ける			
	30	博士論文研究の発表(2)				
	31	試験	試験なし			
教育評価	最終到達目標		評価法		学修法	
	基礎文献の理解、先行研究の検討を通して、研究テーマを決定し、研究計画書を作成できるようにする。 実際に文献調査、実地調査したデータを整理、系統化することができる。さらに、これらと仮説を比較検証し、導き出した結論を整理することができるようにする。		次のように評価する。 研究計画書:20% 文献に関する考察論文:30% 実地調査:20% 授業態度:30%		先行文献をおよび、内外の学術雑誌を読むこと。さらに、自らレポートを作成し能動的に授業へ参加すること。なお、これらの作業は週4～5回のペースで4～5時間行い、自らの課題に応じて、適切に授業に備えること。	